巻 頭 言

これからの中体連「ハンドボール」



全国中学校体育連盟ハンドボール競技部長　佐々木英明

全国中学校ハンドボール大会も、来年度で第30回を迎えることとなりました。今の各ブロック担当になって、平成14年で3周り目になります。この間諸先輩の部会、大会等に対する熱い情熱、また汗と大変なご苦労、そして深い愛情に支えられ幾多の困難を乗り越えながら普及発展してきました。今までの貴重な足跡と歴史を継承しながら21世紀に向け中体連が担う役割を考えると未来は決して明るいとは言えません。各学校現場の実態として、生徒の少子化に伴う部員不足、また、休部・廃部とチーム数が年々減少しているのが現状です。そして、教員採用の減少による指導者不足、それに伴って指導者の高齢化等の諸問題がこれから急速に教育現場へ押し寄せてくるように思われます。

現在、中学校のチーム数は男子772チーム、女子588チーム、合計1360チームが活動しています。大会は、都道府県からブロック大会そして、全国大会とつながっています。そして、各大会において運営する人数、予算等が大変少なく苦労されているのも現状です。専門部としては、大会に参加してくれた選手、役員がいい大会だったと言ってもらえるように日々努力しております。先に述べました少子化に伴う部員の登録減少の歯止めを目指し、魅力あるハンドボールを作り上げ、ジュニアの強化を目指すいま、将来世界で活躍できる選手を育成していき、小学校・高等学校との連携を密にして努力、精進して今後進んでいきたいと思います。ご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

アジア選手権
（女子ナショナル、女子Ｊｒナショナル、男子Ｊｒナショナル）
兼世界選手権予選 男子ナショナル東アジア地区予選、世界選手権アジア大陸第3代表決定戦の総括

強化委員長　**緒方嗣雄**

2000年の８月はハンドボール界にとって大変忙しく熱い夏だった。世界選手権のアジア予選がジュニア男女、シニア男女の４大会行われ、これは協会始まって以来の慌ただしさだった。

■女子ジュニア

７月28日から８月１日まで、女子ジュニアの大会がバングラデシュのダッカで開催された。南アジアで初めてのビッグ大会が催されたバングラデシュは亜熱帯で、しかも連日のように湿度90％以上の悪条件の中での開催であった。その上、交通事情も悪く道路は人、力車、バス、トラック等で溢れ、交差点では収拾がつかない状態である。ホテルと体育館は通常20分ぐらいのところが、突如として１時間程度要するなど、予想がつかないのが現状であった。バスには常時４名の警官が銃で警備に当たっており、慣れない我々にはかなりのショックを受けた。

１回戦のバングラデシュには大勝し、２回戦の中国戦は１点差の惜敗でＡグループ２位で準決勝に進んだが、対韓国戦は残念ながら大敗した。対中国との３位決定戦では、前半３点差で負けていたが、後半に入り予選の屈辱を晴らす連続得点を挙げて胸のすくような逆転勝利を収め、目標の３位を確保し2001年の世界選手権ハンガリー大会の出場を決めた。試合を重ねるごとに勢いと力をつけ逞しいチームとなっていったジュニアチームの活躍だった。

ベストプレーヤー・オブ・ザ・マッチにＧＫの田代ひろみ選手が選ばれた。

■女子ナショナル・男子ナショナル

女子第８回アジア選手権兼世界選手権予選、男子世界選手権アジア東地区予選は、中国（上海）で開催された。出場国は女子７ケ国、男子３ケ国だった。

女子は、台北との初戦は順調に得点を重ね楽勝するもカザフスタン戦は終始リードして行くが、後半に入り一進一退が続き、残り時間２分から連続速攻で逃げ切った。しかしカザフスタンの大型ポストには手を焼いた。第３戦の韓国戦は、ベテラン３人（田中、青戸、小松）を外し、思い切った若手陣で挑んだ。立ち上がり先行するが前半の終盤、攻撃ミスが続き２点リードされ折り返す。後半に入り相手ディフェンスを崩せずミスを重ね速攻を許し韓国の一方的な試合となった。この試合がデビュー戦となった谷口選手（福井商業高３年）は７ｍスローを含め３得点を挙げる活躍をした。Ａグループ２位となった日本は、Ｂグループ１位の中国との準決勝へ進み、この試合に勝負を掛けた日本チームは先行したが、開始15分後から10分間ノーゴールの間に１点のリードを許し前半終了。後半立ち上がり５分間に３点のリードを許し、ディフェンススタイルを変則ディフェンスに作戦変更後、徐々にリズムを取り戻し作戦が功を奏し15分過ぎよりリードを奪い、また、ＧＫの活躍もあり３点差で勝利。そして決勝戦に駒を進めると共に、来年12月イタリアで開催される世界選手権の出場権（アジア３ケ国）を得た。

韓国との決勝戦は、予選と違い試合開始と同時に目一杯の試合で、日本の多彩なディフェンススタイルをものともせず得点を重ね10点の大差で敗れる。この大会でのベストセンター賞及びＭＶＰに田中美音子選手が選ばれた。この大会での目標である、世界選手権の出場資格獲得とアジア２位は一応達成できたが、韓国戦での試合内容に大きな課題を残した。今後、固有技術の向上に力を注ぎ目標をしっかりと見極め４年後のアテネオリンピック大会に備えなければならない。

男子世界選手権アジア東地区予選は、中国、韓国、日本の３チームの対戦となった。初戦は中国と対戦。２月の熊本アジア選手権では前半３点リードしていたが、後半に入り中国にアタックディフェンスを仕掛けられ敗れた日本であったが、前半こそ身体の切れが悪かったものの１点リード、後半若手選手の活躍で７点リードで勝利。１日おいての韓国戦は、試合開始より得点を重ねられ勝負を決められた。後半には互角の試合だったが、前半の点差が大きく７点差で東地区２位となり、西地区２位のチーム（同時に西地区予選も行われたがトラブルがあり順位が決定していない）とアジア３位決定戦をバンコク（第３地域）で行うこととなった。

男子は帰国後３位決定戦に備えて合宿に入る。西のトラブルに巻き込まれて日程も二転三転した。27日バンコクでサウジアラビアと対戦することが決定した。オルソン前全日本監督率いるサウジアラビアとの３位決定戦は、立ち上がりから終始サウジアラビアのペースで進み日本は一度もリードを奪うことなく後半20分８点差と引き離される。奮起する日本もディフェンスでのリズムを取り戻し相手のミ

スに乗じて２点差まで詰め寄った。しかし前半のハンディが大きく３点差で世界選手権出場の夢が破れた。

■男子ジュニア

男子ジュニアアジア選手権兼世界選手権予選は、イラン（マシャド）で11チームの参加で開催された。第１戦、イランと引き分けた。クウェート、カタールに敗れたもののオマーンに勝ちグループ４位となりＢグループ４位の中国との７位決定戦において延長戦の末勝利を得た。

ジュニアチームによると、審判の不正が横行し正しいゲームが成立していないとのことであった。また準決勝では、韓国チームの試合放棄が伝えられ、同じアジアにありながらスポーツに対しての考え方、習慣が余りにも違い過ぎる西アジアにはかなり参った男子の大会であった。

2000年に入りナショナル全チーム（シニア男女、ジュニア男女）が世界選手権出場を目標にして強化を図ってきた。中近東の強さも目立つが、不正も何でもありで2001年世界選手権は結果として女子ナショナル（シニア、ジュニア）のみの出場となった。男子は、韓国、中国を対戦相手としてきたが、今後は中近東をも頭に入れた強化を進めなければアジアの代表権は得られない。

女子についても、カザフスタン、北朝鮮が徐々に力をつけてきているので、今後は中国・韓国と併せて強化を図らなければ、アジアの代表としての世界への挑戦は果たせないことを痛感した。

最後になりましたが、代表選手を送っていただいた各チーム、ハンドボール関係者、帯同いただきましたドクター、トレーナー、スカウティング（分析）に活躍したいただきました監督、コーチ、度重なるフライト変更に快く対応していただきました㈱エモックエンタープライズの方々にこの場を借りまして感謝し御礼申し上げます。

選手は強化活動を休む訳にはいきません。どこにいても、誰がいても常に技を磨き、体力アップを心掛け強い全日本チームの一員としてアジアの代表を目標に励んでください。

第８回アジア女子ハンドボール選手権大会兼第15回世界女子選手権アジア大陸予選

全日本女子監督　伊藤宏幸

１．期間

平成12年８月８日～８月18日

２．場所

中国（上海）

３．試合結果と戦評

１位・韓国　２位・日本　３位・北朝鮮　４位・中国

５位・カザフスタン　６位・インド　７位・台湾

【予選リーグ】

■第１戦（８月10日）

日本　27（12―4／15―8）12　台湾

立ち上がり５分まで互角の展開であったが、相手ミスに乗じて小松、倉知の連続速攻で得点、次第に点差を広げ８点差をつけ折り返す。

後半も攻守に圧倒し大差で初戦を飾った。

［日本得点］小松・山下麗　5、田中・倉知　4、松永　3、青戸・大石　2、浦田・中村　1

■第２戦（８月11日）

日本　25（14―10／11―13）23　カザフスタン

青戸のポスト、山下麗のロングシュートなどで10分には７―３とリードしたが、カザフスタンの大型ポストと強引なカットインプレーなどで追撃され前半残り５分には１点差に詰め寄られる場面もあったが、田中の個人技などで４点差で折り返す。

後半出足、日本のミスを突かれ５分に同点とされ、その後、一進一退の攻防が続き残り２分、同点の場面でコンビプレーから田中、中村の速攻で駄目押し、逃げきり、予選リーグ２位内（準決勝進出）を決めた。

［日本得点］田中　8、中村　5、山下麗　4、小松　3、倉知・大石　2、青戸　1

■第３戦（８月13日）

韓国　28（13―11／15―8）19　日本

日本は青戸・田中・小松のベテランを外し若手陣容で挑んだ。前半15分まで、浦田のポスト、佐久川のサイドシュートなどで１点リードするが終盤、攻撃ミスからの速攻などで２点リードされ折り返す。

後半出足も相手ディフェンスを崩せずミスが続き、速攻を連発され点差を広げられた。しかし日本もこの大会に初めてデビューした谷口（福井商業３年）が７ｍＴを含む３得点を挙げるなど非凡なところを見せ明るい材料があった試合であった。

［日本得点］中村　7、浦田・佐久川・谷口　3、倉知・大石・松永　1

＊予選リーグ順位

Ａ組　１位・韓国　２位・日本　３位・カザフスタン　４位・台湾

Ｂ組　１位・中国　２位・北朝鮮　３位・インド

■準決勝（８月15日）

日本　24（9―10／15―11）21　中国

日本は前半10分まで６：０スイッチディフェンスから倉知の速攻などで常に先手を取り続けたが、15分から25分の10分間セットオフェンスのミスからノーゴールが続き、１点リードされ後半に入った。

後半開始５分、３点のリードを許したが６：０からのクロスアタックディフェンス、１：５、変則１：５ディフェンスなどを使い分けながら、相手のリズムを崩し、15分に同点とし、その後も田中のカットイン、山下麗のロングシュート、小松の速攻などで逆転し、加えてＧＫ山口のファインセーブの連続で勝ち、決勝戦に駒を進めると共に、来年12月イタリアで開催される世界選手権の出場権（アジア３か国）を勝ち取った。

［日本得点］田中・山下麗・小松　５、倉知　４、
中村　３、青戸　２

■決勝（８月17日）

韓国　33（14－９／19－14）23　日本

日本は前半からディフェンスシフトを６：０、１：５、ワンマンツー、ダブルマンツーなど、目まぐるしく変えながら韓国チームのオフェンスのリズムを崩しにかかったが、呉　成玉を中心に動じることなく確実に得点される。日本も山下麗のロング、田中のブラインドシュート、倉知の速攻などで懸命に反撃を試みるが、ディフェンスのリズム、セットオフェンスでの確率等で及ばず準優勝に終わった。

［日本得点］田中　８、倉知・山下　６、
青戸・小松・中村　１

＊大会でのベストセンター及びＭＶＰに田中が選ばれた。

＊課題及び反省

当初の目標であった世界選手権大会にアジア２位という座で、出場権を得たことが大きな収穫であった。今年１月に行われたオリンピックアジア予選のメンバーから半数の８名（レギュラー４名）が入れ替わり、加えて約２カ月の強化日程から考えると、非常に良く頑張ってくれたのではないかと思われる。しかし、今後を考えると中国の若手の台頭、北朝鮮の驚異的なスタミナと粘り、徐々に充実しつつあるカザフスタン、そして韓国の層の厚さ。

対する日本は、特に攻撃面で田中に頼らざるを得ない状況、両45の層の薄さ等が大きな人材面での課題である。

ロングシュートを打ちこめる、または１対１の突破力のある選手を育成していくことが重要である。

ディフェンス面では、中国は若さのもろさが出て日本の変則的なディフェンスに対応しきれない部分があったが、それだけでは、韓国には通用しない。さらに確固たるものにするためには、１対１の強さ・速さ・上手さがないとディフェンスシステムを変えるだけの戦術では対応しきれないと思われる。

今回、特筆すべきことは、谷口選手がデビューしたことである。

インターハイ敗戦後の翌日合流し、予選リーグ最終戦の韓国戦に出場し、７ｍＴを含め３得点をあげた。ディフェンス面でも体格を活かしたディフェンスで韓国選手が唖然とする場面もあった。しかし、谷口選手も今の体力をさらに計画的に伸ばしていく必要性がある。今のままでは、いずれ大きなけがを起こしかねない現況である。

いずれにしても、短期・長期の課題と目標をしっかり見据えながら一歩一歩、クリアしていくことが、アテネにつながることを信じつつ次への挑戦に備えたい。

第８回アジア女子選手権大会に出場して

谷口尚代（福井商業高校）

私は今回、このアジア選手権に参加させていただき、大変貴重な経験をさせていただくことになりました。

８月12日、インターハイがあったため、私は、他のメンバーの方々とは遅れて中国入りしました。実際、その前に合宿に参加した時も、私は２日間という短い時間でした。そんなこともあって、私のこの大会への不安、緊張はすごいものでした。本当に私に何ができるんだろうという思いもありましたが、今できることを精一杯やるしかないだろうと逆に少しだけ開き直ってもいました。

私が初め想像していたナショナルチームというのは、ピリピリした空気の流れるところなんだろうと思っていました。失礼かもしれませんが、本当にそう思っていました。しかし、実際チームの中でやってみると、私の想像とは違いました。練習中はもちろん厳しさがありましたが、その中にも一人一人の方の気づかい、優しさが私には見えました。練習以外のところでは、練習中には見られない面を見ました。みなさんすごく楽しい方ばかりでした。練習と私生活の区別をちゃんとしているのがすごいと思いました。そんな雰囲気の中で、私も少しだけとけこめた様な気がしました。

８月13日、私のナショナルチームでの初めての試合の日、私は朝から緊張がとけませんでした。午前の練習でも、私のためにフリースローの練習をしていただいたりしました。練習が終わってホテルに帰っても緊張は高まったままでした。他の方からは「大丈夫。思いきりやればいいんだから」と声をかけていただきました。

そして、試合の前のアップの時は、頭が真っ白になる程緊張しているのが自分でもわかりました。そこに来るまでは、だいぶ開き直ってもいたのに、やはりいざという時は、緊張してしまうものです。あっという間に、アップが終了して、ユニフォームに着替えました。初めて着るナショナルのユニフォームです。私はそこで、もう一度確認しました。「とにかく今自分のできる精一杯のことをやろう」。その時も、まだ緊張はとけていませんでした。

試合の相手国は韓国でした。メンバー紹介が終わり、いよいよ試合開始です。最初、私は、ベンチに座っていました。その時の私の緊張はピークに達していました。落ち着くことなんて考えられませんでした。そして、開始から15分程たって、私の名前が呼ばれました。頭の中は真っ白でした。しかし、意外なことにコートの中に入ってしまうと、さっきまでのあの緊張や不安はなくなり、声を出せば出すほど、なくなっていきました。私はセンターディフェンス

とポストをやらさせていただきました。ディフェンスでは、私のために周りの方にだいぶ負担をかけてしまいました。私自身、必死に守ろうと思いましたが、韓国の方はフェイントが上手く、今の私にはまだまだ守り切ることはできません。その分声を出して頑張ることに専念しました。オフェンスでは、私の位置どりが悪いのに、何度かパスを受けましたが、シュートまでいけません。そして、やっとシュートチャンスがきたと思ったら、キーパーにあたってしまいました。しかし、その後、速攻で何とかパスを受け、私はシュートを決めることができました。その時は、まぐれのシュートだと思っていましたが、やはりうれしかったです。

その後も、7mTを2本打たせていただき、決めることができました。本当にうれしかったです。ディフェンスに帰った時にみなさんにむかえていただいた時のことは忘れられません。

今回、不安と緊張だらけの中での初めてのナショナルでしたが、すごく貴重な経験だったと思います。他のメンバーの方にはいろいろとご迷惑をかけてしまいましたが、その分、これから力をつけていこうと思います。そして今度は、自分に少しでも自信を持ってプレイできるように頑張りたいです。

2001年男子世界選手権 東アジア地区予選

［場　所］　中国・上海
［参加国］　日本・韓国・中国
［試合結果］

★第1戦（8月12日）

日　本　29（11—10 / 18—12）22　中　国

★第2戦（8月14日）

韓　国　27（15—7 / 12—10）17　日　本

★第3戦（8月16日）

韓　国　33—19　中国

＊この結果、日本は第3代表決定戦に出場する。

2001年世界選手権アジア第3代表決定戦

［場　所］　タイ・バンコク
［出場国］　日本（東地区2位）・サウジアラビア（西地区2位）
［試合結果］

サウジアラビア　26（13—10 / 13—13）23　日　本

第7回アジア男子ジュニア選手権大会

佐藤喜一

■1回戦［8月30日（水）］

日本　28（16—13 / 12—15）28　イラン

《戦評》

会場を埋め尽くした地元の大観衆4000人の中、日本は開始早々から好調なスタートで、10分までに6—4と優勢に試合を進めた。特に、宮崎・内田の左右のフローターが得点する。また、20分までに12—6と大きくリードする中、相手ディフェンス要員が失格となるなど一方的な試合展開と思われたが、残り5分になり相手に連続4得点を与えるなどして前半16—13と接近された。

後半も開始5分間に得点され、18—19と逆転され、その後は両チーム共に一進一退をくりかえしている中、共に5～10分間はシュートが減少した。

15分過ぎから突如イランのシュート数が増えるが、一方日本は考えられない程シュート数が減少する状態が続いた。残り5分となりイランに3連続得点を許し26—27と再度逆転され会場が騒然となり、殺気すら感じる展開で、残り1分イランが先に得点し27—28とリードしたが、残り15秒、日本がフリースローをもらい宮崎が貴重な得点を取り同点となり、会場も唖然とさせる劇的な幕切れで引き分けた。

【得点者】前半：宮崎9点・内田5点・岩永1点・當間1点
　　　　　後半：宮崎6点・志賀2点・當間2点・地引2点

■ 2回戦［8月31日（木)］

クウェート　33（17―11 / 16―11）22　日本

《戦評》

日本の出足が悪く、10分間で早くも7―3とリードされる試合展開で、徐々にではあるが調子を上げ一時は11―8までに得点をつめたものの、残り10分過ぎから日本はシュートできない判定が続きクウェート有利に展開させるレフェリーの笛にいらいらしながらも17―11で前半が終わる。

後半も同様な内容で、相手のシュート数が28(クウェート)／14(日本)と問題にならない数で得点は離れる一方であった。残り5分となり相手有利な展開で試合内容が決したと判断したレフェリーの笛が極端に変わり、逆に日本有利となりシュート数が5／8となる。このような不満の判定にも屈せず、選手は最後まで粘り素晴らしい試合態度で望んだことには拍手を贈りたいと思います。

国際試合での審判の判定を身をもって体験したことをプラスに考え、次の試合に切り替えていきたいものです。

【得点者】前半：宮崎5点・内田3点・林2点・中谷1点
後半：宮崎5点・猪妻3点・林1点・内田1点・中谷1点

■ 3回戦［9月1日（金)］

日本　33（15―9 / 18―20）29　オマーン

《戦評》

日本は気迫のこもったスタートで、10分間で主導権を握り、セット・速攻と多彩な攻撃の中で、特に光ったのは地引のサイドシュートが決まり、相手キーパーをかく乱し確実に得点する内容で、相手選手に大きなダメージを与え楽な展開で15―9と引き離して前半を終えた。

後半開始早々、相手がダブルマンツー（宮崎・内田）で対応してきたが、日本は冷静に判断して、特にディフェンス要員の中山・中谷・文屋が完璧に近い守りを見せ、無駄な反則をせず要所要所を守り抜き、得点もスタメン全員が得点するなどの内容であった。しかし、雑な攻撃になり終盤10分にシュートミスが続き日本に動揺が走ったが、残り5分になって平静に戻り相手攻撃を食い止めた。

国際試合では余程のリードをしない限り集中力を欠くと直ちに反撃を迎えることになる貴重な体験をした試合であった。

【得点者】前半：宮崎5点・地引5点・林2点・吉田1点・當間1点・文屋1点
後半：宮崎4点・中谷4点・林4点・猪妻2点・林1点・内田1点・當間1点・志賀1点

■ 4回戦［9月4日（月)］

カタール　28（14―13 / 14―8）21　日本

《戦評》

本日のカタールを制すると上位入賞が期待できる一戦でもある。開始より両チームともに順調な滑り出しで、20分過ぎまで互いに正確なシュートで確実に得点をする展開で、互いに1本1本を決め、日本10―12カタールと熾烈な戦いを繰り広げていたが、残り10分過ぎからは両チームともに極端にシュートが減り、前半1点差で終わる。

後半、日本は2点連続得点で逆転し順調に展開していたが、その後シュートをさせてもらえない状態となる。一方カタールはコンスタントに得点する中で得点は開きだした。シュート数を見ても日本9本に対して相手は28本と問題にならない数である。

この間、レフェリーの判定の操作が明らかであり、内容的にカタールの勝ちが決したと思われた残り10分からは日本も本来の姿で対等に戦えるようになったが、いかんせん後の祭り状態だった。

極東レフェリーの演出なのか、現金が動いている証拠なのか疑問の残る結果で、国際試合における不透明性や平等性を無視した判定が浮き彫りにされたことを痛感した。

【得点者】前半：宮崎6点・地引2点・中谷2点・内田2点・當間1点
後半：地引6点・猪妻2点・中谷1点・宮崎1点

■ 7～8位決定戦［9月7日（木)］

日本　40（20―18 / 14―16）36　中国
（4―2 / 2―0）延長

《戦評》

悪くても5位～6位を狙って大会に臨んだが、カタール戦でつまづいたために一つ下のランクでの対戦となった。長身揃いの中国に対して劣ることなく宮崎を中心として、地引・内田・猪妻が要所要所で素晴らしい活躍で得点を挙げながら、対等にゲームを展開し、前半日本のシュート確率65％と効率のよい内容で2点差をつけて終了する。

後半は開始早々に2点得点され同点となったものの、すぐに連続5得点を入れ突き放したと思われたが、中国も必死に食い下がる。その後は一進一退を繰り返し宮崎・猪妻が要所で得点をしながら残り10分となり、4点差であったがちょっとした緩慢なプレーに隙間をつかれ、中国に残り5分に速攻、フリースロー等で加点されリードを保つことができず同点となり延長となる。

延長前半4―2と有利に展開する中、中国のシュートミスが目立ち、後半になっても中国を得点0点に押さえる。その中で特にゴールキーパー木下の素晴らしいセービングが光り、中国のシュートを阻止し4点差をつけて勝利した。

この試合で高橋監督のベンチワークが冴え、起用した選手が随所で活躍するなど冷静沈着な判断は、第7位という成果でU―19としては過去最高の成績で大会を終了した。

【得点者】前半：宮崎8点・内田4点・地引3点・猪妻3点・大田2点
後半：宮崎7点・猪妻6点・岩永3点・地引2点・林1点・内田1点

第8回日韓中ジュニア交流競技会報告

若き力が日本ハンドボール界に新風を

日本ハンドボール協会代表
全国高体連ハンドボール専門部部長　坂理　泰幸

平成５年、郡山市で第１回日韓中ジュニア交流競技会が始まって以来韓国にまったく歯が立たなかった日本が、この８月23日～29日、韓国全州市で行われた第８回大会で男子・県立氷見高校が負け無しの２勝１分という見事な結果を残した。

熊本の敗北が尾を引いていた私にとって、今回の氷見高校の素晴らしい試合は日本ハンドボールの復活を思わせ溜飲が下がる思いであった。体力に劣る氷見高校選手が臆することなく韓国選手と渡り合い自在にプレイする姿に私は思わず感嘆の声を上げていた。

ディフェンスは、基本に忠実で反則も少なく素早いツメで動きを封じるので、さすがの韓国１位裡里商高の選手も、攻めあぐね万策尽きたという気配さえ感じられた。

オフェンスでは、目立ったのがスピードで、ボール回し・フェイント・カットインの速さは韓国選手を翻弄する小気味の良いものであった。また、南漢高校のテクニシャンＧＫをかわして決めるシュート力は観客を沸かせた。

今回の好成績を残した氷見高校の試合を通しての感想は、①基礎・基本技が確実に身につき自然にプレイに生きている、②自らの力を信じ最後まで力の限りプレイするスタミナと精神的強さ、であった。

このような力を選手一人ひとりが身につけられたのは並大抵のことではないはずである。金原監督のハンドボールへのひたむきな情熱・研究心が伝統ある氷見高校ハンドボールの中で結実し、金原流ハンドボールとして選手に理解させ、技術として一人ひとりに培っていった指導者としての力量は高く評価出来る。

女子の桜花学園高校は、残念ながらかなりの差で敗れはしたが、戦術・技術では遜色はなかったが、力強さ・体力の面での見劣りは否めず、まだ力の差があると感じた。しかし数年のうちに対等に戦える力が女子にも養える気配は十分あり期待している。

今回参加した氷見高校、桜花学園高校は春の選抜大会に優勝したが、共にインターハイ地区予選で敗れ出場出来なかった。しかし気持ちを切り替え今大会に集中し日本代表として挑み立派にその役を果たしてくれたことに感謝したい。

終わりにインターハイ優勝の伊奈高校や瓊浦高校を含めたいくつかのチームは韓国と十分に戦えるように感じ、日本の高校生はアジアのトップ韓国と互角に渡り合える力がついたように覗えた。近い将来、彼らが全日本チームの一員となりアジア代表としてオリンピックに世界選手権に活躍してくれることを願っている。



【試合結果】

〈男子〉

氷見高	25―25	裡里商高
氷見高	32―25	南漢高
氷見高	42―15	中国

〈女子〉

桜花学園高	15―27	天安工高
桜花学園高	19―31	井邑女高
桜花学園高	25―19	中国



全日本U－23ロシア遠征（世界学生最終選考及び強化）報告

(財)日本ハンドボール協会強化委員U－23担当
全日本学生ハンドボール連盟理事長　福地　賢介

今回の遠征は、本年12月28日から1月5日まで、ポルトガルにおいて開催される第16回男子世界学生選手権大会へ参加する選手の最終選考と強化を目的としたものである。

過去2回は、モスクワへの遠征であったが、シドニー五輪へ参加するロシアの各競技のナショナルチームの合宿で宿舎が確保出来ず、ユーゴの世界学生で知己を得たロシア学生選抜チームのユーリ監督の協力で、モスクワから1300km離れたクーバン地方（黒海に面した保養地で知られるソチの近く）のクラスノダールへの遠征となった。

選考及び強化目的ならば、ロシアとの練習試合のみでなく、他の国とも国際交流が出来れば、よりよい効果が期待できるのではないかという、ユーリ監督の配慮で、ロスネフト石油がスポンサーとなって、ロスネフトカップの冠国際大会を準備してくれていた。

ロシアスーパーリーグの2チーム、エジプト1部リーグ所属チーム、ウクライナ学生選抜、ロシアジュニア候補チームの6チーム総当たりの大会となった。

なお、CAUSTIC＝VOLGGRAD、SKIF＝ROSNEFT－1、GEZIRA・SC・CAIROには、シドニー五輪参加選手が所属しているが、今回ロシアナショナルチームはドイツにて強化合宿中で不参加であった。

クーバンアカデミーの専用体育館が会場となったが、宿舎はKrasnodarの中心地より車で15分程郊外に行ったBorodinaという町の小学校に隣接した、ハンドボール専用宿舎（体育館併設・ロシアナショナルチームも使用）であった。

大会は、25日＝テクニカルミーティング、26日から競技が開始（開会式）されて、29日の休息日を挟んで31日に無事終了したが、開会式のアトラクションでは、ロシア民族舞踏もあったり、気配りが感じられた。

今回の遠征では、試合や普段の生活を通して、

1．ヨーロッパ勢と戦える人材であるか否か、対応力（オフェンス・ディフェンス他）

1．U－23としてのチーム戦術・戦略に対応できる個人技術（ポジション他）の有無

1．チームとしての選手のあり方（チームワーク・団体生活における融合性、その他）

1．内外環境に対する順応性他の有無（食事面の好き嫌いの有無も含む）

1．その他

以上のような選考基準をベースにいろいろな角度から選考を行った。

今回の選考対象選手は、昨年4月に全国各学連から候補選手を推薦してもらった選手、強化委員会からの推薦選手、全日本学連競技推薦選手60名弱を、昨年5月に第一次選考して25名にしぼり、さらに、昨年8月下旬から9月に、選考と強化を兼ねたドイツ遠征、11月の全日本学生選手権大会、本年5月の選考及び強化合宿を経て、17名に絞られた選手である。

松井総監督・松監督（家庭の不幸で不参加）のチーム構想は、過去のロシア・トルコ・ハンガリー・ユーゴの各大会の経験をもとに、早い攻撃と攻めの守備をテーマとして勝つチームであり、選手も、上（全日本）に行っても通用できる選手の育成を考慮してのものである。

ロシアスーパーリーグのCAUSTIC、同ROSNEFT－1、エジプトの1部リーグのGEZIRA及びUKRAINA学生選抜は、フローターは195～205cm台で、エジプトを除いてポストも200cm台の選手が多かった。また、大型選手を揃えているCAUSTIC、ROSNEFT－1両チームは共に、早い攻め、早い帰陣もあって、パワーとスピードを兼ね備えた良いチームであった。

今回の世界学生に参加予定とされるUKRAINA学生選抜は、190～200cm台の選手を揃えて、ロシア2チームより大型チームであった。また、ZEGIRAは、監督がロシア在住であり、比較的ロシア2チームは似た攻撃であった。

U－23は、東西学生選手権大会終了直後のために、今一つコンビネーションが悪く、初戦を除き全体的にチームバランスが悪く、イージーミスが出て、立ち上がりから攻め込まれるケースが多かった。しかし、CAUSTIC戦では、あわやのところまで追い込んだり、UKRAINA学生選抜戦では、一度は逆転するというところまで行っており、ROSNEFT戦では大敗したものの、ZEGIRA戦では、早い攻撃と粘りのある守備を見せて勝利をおさめている。ROSNEFT及びZEGIRAの要請で、モスクワへの移動日である1日に3チームによる30分の練習試合が組まれた。30分ゲームながら、2ゲームともチームバランスがよく勝利している。また、29日、30日は同じ宿舎で合宿をしていたロシアスーパーリーグ前期10位のSUGULというチームとも練習試合を行ったが、ROSNEFT－1同様にパワーとスピードのある良いチームで勉強になった。特に30日には合同練習も行い刺激にもなった。

ロシアの高さ、パワー、スピード、また、センターやサイドはU－23と変わらない。しかし、ゲームメイカーであるセンターやサイドシューターの上手さとふれ合うことが出来た。大会の成績は4位ではあったものの、大会や練習試合、合同練習を通し、各選手が対外国人、特に、従来から課題であった大型選手や、長身ポストへの対応力、また、得点力を増すには、身上とする早い攻撃で得点機会の増加を図ること、その他の面を経験出来たことは大きな収穫であった。

松井ヘッドコーチも『初期の目的である選手選考と今後の対応について、一応の成果を上げげたと思う。今後は、選ばれた選手のチーム練習を強化し、ポルトガルの世界学生での上位進出を狙いたい。そして、アテネに向かう全日本の起爆というか刺激になることが出来ればと思っている』としている。

今大会は、前述のように『OIL COMPANY ROSNEFT CAP』という冠大会であったが、後で聞いて初めてわかったが、1,500ドルの賞金がかかっていた。

1,500ドルというと日本円で約16万円で、安い賞金と思われるかも知れないが、ロシアの物価が日本の十分の一であってみたり、公務員の一般職の月給が150ドルとか、北極海で沈没した原子力潜水艦の乗組員の月給が50ドルであったり、我々のチームについてくれた女性の通訳が、週4日、1日4時間、英語とギリシャ語の授業を教えている学校の先生であり、月給が30ドルと聞いてビックリした。ただ、外国語が出来て、民間企業に勤務する者は月給が1,000～1,500ドルと言われているが、狭き門とされる。このような経済状況下でのロシアでは、それなりの賞金と言える。因に、クラスノダールでの物価を見ると、体育館で売られていた一番安いケーキが8円（1ルーブルが4円)、ジュースが35～40円、また、町中で売られている西瓜が20円、ＣＤが200～210円内外、キャビアが400円、中国製パンストが20～30円であった。モスクワは、物価がやや高めであるが、それでも地下鉄は20円である。

クラスノダールは酒類が比較的有名と聞いたが、お土産



的なものはキャビア、ウオッカ、シャンペン（スパークリングワイン同様、やや甘口)、コニャック程度であった。観光客目当てのモスクワの土産物価格とは大分違っている。モスクワは、4年前と比較して物はかなり出回っているという印象を受けたが、クラスノダールの市場の品数も豊富であった。宿舎周辺は日本の公団住宅と同じような建物のアパート、一軒家（平家建）が所在しているが、建て混んだものではなく、空き地の十分に目立ったところである。

徒歩5分程のところに、小さな食料品店、電話局、郵便局がある程度で、買い物するには、若干不便ではあるが、ハンドボール宿舎としては好環境下にあると言えた。居住性などにも不満はなかったが、従来であるとシャワー対応であるものの、今回はバス付とのことであった。しかし、そのバスに栓がなく結局はシャワー対応と同じであったとか、また、びろうな話で恐縮であるが、用便後の処理に使用した紙を便器に流さずに、付設のくず籠に入れる様に言われたのにはビックリした。念の為に、役員パーティーに招待された時に、松井ヘッドコーチとトイレを確認したが同じであった。

宿舎側の好意で、ロシアのナショナルチームと同じメニューが用意されたが、朝食からフランクフルトソーセージのような大きなソーセージが3本にパスタが添えてあり、それに目玉焼き(卵3ケ)、パン、ハム、チーズ、ヨーグルトにロシアティー等がベースで、昼食がメインで、サラダ、ボルシチ、肉料理（大半鶏肉、量は鳥1羽の半身位、米かパスタ添え)、デザート（チーズケーキは味がきつくて辞退)、クッキー、パン（黒パン・食パン)、ジュース、菓子パン等、夕食は、サラダ、肉料理、パン、ハム、果物他というものであった。味は別として、量的には多いくらいで、役員は、半分にしてもらった程である。Ｕ－23の若い選手は、量的にはさすがに満足するものであったようであるが、ロシアのナショナルチームのパワーが、この食事から垣間見られる様な気がした。

食事の味つけは、塩と胡椒程度であって、濃いか、薄いか両極端に近く、マヨネーズやケチャップが欲しい位であった。なお、ロシアではサワークリームをサラダやボルシチ、その他何にでも使うと聞かされた。ソーセージにケチャップに似た調味料をもらったが、ケチャップの味ではなく辛かったのが、逆に美味しかった。また、総体的に野菜が美味かったが、野菜を残す選手もあり、このへんにも、今の選手の食習慣の違いも感じられた。

プレー面のみでなく、宿舎での団体生活における適応性や、食事等の日本とは異なる食文化の違いによる外部環境等への順応性、その他も十分に観察できており、選考材料になっている。余談ではあるが、このような環境下でハンドボールの研修が出来ればと思い、平成13年3月に東日本学生選抜チームの研修遠征の打診も行ってきた程である。

前述のように、各地区学連の推薦選手、その他の推薦選手を、過去、数次の選考でセレクトして17名が残り、今回の遠征が最終選考となった。この結果と世界ジュニア選手権大会予選に参加したメンバー、Ｕ－19の選手と合わせて選考をする予定である。また、次回大会も見据え、さらに、将来、全日本チームで活躍が期待される選手の育成も考慮し、研修選手として帯同する選手の選考もする予定である。

最後に、最近の遠征では、医科学委員会の協力で、ドクター・トレーナーの帯同があり安心して遠征ができる。今回はこのようなことがあったモスクワのシェルメチボ空港で、搭乗手続きのためにカウンターに並んでいる時、突然、隣の列に並んでいた日本人観光客の70才内外の男性が倒れた。これを目撃した沖本ドクターが直に駆けつけ、心筋梗塞の診断と安静の処置で、空港ドクター到着までの応急対応を行い無事入院の段取りをつけてくれた。さらに帰国時に、成田で、日本の家族に心筋梗塞の軽度のものではあるものの、大事を取って入院したということや病状と処置、入院の状況を丁寧に連絡していた姿を見て、良いドクター、トレーナーに巡り会えたと感謝している。

各方面の方々のご支援で本年も選考及び強化遠征を出来たことを紙面をお借りして、お礼申し上げると共に、アテネを目指す全日本に1名でも貢献する選手を育成し送り出したいと思って努力いたす所存であり、これからもよろしくご支援をお願い申し上げます。

ロフネストカップ戦評

〈8月26日〉

Ｕ－23 (全日本学生候補)	35	(18－6 17－10)	16	SKIF－ ROSNEFT＝2

立ち上がりから柳本、豊田等の速攻などを交えたスピー

選　手　団

担　当	氏　名	所　属　及　び　担　当　他
チームリーダー	福地　賢介	日本協会強化委員・アンダー23担当・全日本学生連盟理事長
ヘッドコーチ	松井　幸嗣	日本協会男子強化委員長・全日本学連理事・日本体育大学男子監督
ド　ク　タ　ー	沖本　信和	日本協会医科学委員会・U－23チーフドクター・産業医科大学
ト　レ　ー　ナ　ー	川波　賢一	日本協会医科学委員会・U－23チーフトレーナー・濱脇病院
総務兼通訳	坂本ますみ	全日本学生連盟国際交流委員会・KKエモックエンタープライズ

プレイヤー	氏　名	所　属	学　年	出身高校	身長cm
GK　1	高木　尚	日体大	4年	北陸高校	186
GK　12	吉田　耕平	大体大	4年	北陽高校	184
GK　16	松村　昌幸	福岡大	4年	久工大付	187
CP　2	澤田　俊祐	国士館	4年	明星高校	180
CP　3	小倉　学	日体大	4年	霞ヶ浦高	194
CP　4	作田　幸治	日体大	4年	熊本市商	187
CP　5	太田　芳文	日体大	3年	伊奈高校	186
CP　6	柳本　義文	日体大	3年	久工大付	166
CP　7	前田　誠一	日体大	3年	浦和学院	183

プレイヤー	氏　名	所　属	学　年	出身高校	身長cm
CP　8	豊田　賢治	国士館	3年	浦和学院	181
CP　9	田中　秀樹	大体大	3年	久工大付	191
CP　10	横地　康介	名城大	3年	岡崎城西	178
CP　11	畠中　益喜	福岡大	3年	久工大付	186
CP　13	四宮　英伸	大体大	3年	高松工芸	170
CP　14	比嘉　律	日体大	3年	那覇西高	165
CP　15	田中　勝	日体大	4年	高岡向陵	181
CP　17	窪小谷貴祐	日体大	3年	学法石川	196

ドある攻撃で主導権を握り、小倉、前田のミドル、澤田のステップが絡み順調に加点、前半で大きくリード。後半に入っても、四宮、畠中、比嘉、柳本と立て続けに得点を重ねて大勝したものの、東西学生選手権後日がなく、合同練習の不足が目立ち、攻守共にバランスの悪さが目についた。

SKIF＝1のジュニアチームで18才から20才の選手を中心にセレクトされた若い学生チームであった。

〈8月27日〉

U－23（全日本学生候補）　23（9－16／14－13）29　CAUSTIC

ロシアスーパーリーグ（1部リーグ）前年2位のチームであり、主力の数名がシドニー五輪の合宿の関係で欠場したが、バランスのとれたスピードタイプのチームであった。

U－23は、立ち上がりオフェンス陣がミスを多発、それを拾われての速攻を誘発、10分経過時点で1－8とリードされた。その後、立ち直って何とか食い下がって、前半は7点差で終了。

後半に入ると、オフェンスのパスワークが良くなると共に、田中秀、窪小谷、作田、太田、田中勝のディフェンス陣の頑張りもあって、何とか失点を抑えている間に、小倉のステップ、横地のミドル、豊田、柳本、比嘉の速攻と立て続けに加点して、残り5分には3点差に追い上げた。しかし、ゲームメーカーB・DMITRIYの冷静でうまいゲーム組み立てにより長身ポスト、F・DMITRIY（205cm）を多用した攻撃で連続得点され、前田へのマンツーマンマークによるディフェンスで守られ、その後も加点されて敗れた。一部の主力が不在ながらも、ロシアスーパーリーグ2位の底力を見せつけられた。

〈8月28日〉

U－23（全日本学生候補）　27（13－15／14－15）30　UKRAINA学生選抜

ウクライナ学生選抜とは、過去、世界学生で2度対戦(トルコで大敗、ユーゴで延長で勝）しているが、相変わらず200cm台の長身者を5名を含めた高さのチームであった。年齢的にも20～25才の構成で、荒削りの印象を受けた。

U－23は、前半10分までは、その高さに、ディフェンスもオフェンスも戸惑い気味であって、先手を取られていたが、その後、相手のミスを柳本、作田の速攻に結びつけ、さらに、小倉のミドル、窪小谷のポストで対抗。しかし、ウクライナの左腕エースSKIBAのミドル、長身フローターBALURAのロング、DEGTIARVのポストから得点されて、立ち上がりの2点差を追う展開で推移、結局、2点差で前半を折り返した。

後半に入って、柳本、比嘉の速攻、小倉のミドル、窪小



◀対エジプト戦　比嘉のサイドシュート

谷のポストで順調に得点を重ねて、両田中、窪小谷、作田、太田等のディフェンス陣が頑張り、15分には逆転、18分には2点差としたが、その後、長身ポスト、DEGTIARVのマークが甘くなったり、受け身になったりして、ディフェンスのバランスが悪くなり、そこをエースSKIBA等につかれて得点を許し、25分過ぎに再逆転されて敗れた。

〈8月30日〉

U－23（全日本学生候補）　23（11－19／12－19）38　SKIF－ROSNEFT＝1

開始早々前田のミドルで先攻したものの、その後はミスが続き、連続失点となってゲームの主導権を握られて、GK吉田の好守で何とか凌いだものの、ゲームメーカーOLEGの好リードから、ポスト、ミドル、速攻と加点されて、前半で勝負をつけられた。

後半に入っても、長身ポストALEXANDRや、VIKTOR

個　人　記　録

ロスネフトカップ個人得点

選手名	SKIF−2	CAUSTIC	UKRAINA	SKIF−1	GEZIRA
澤　田	3	0	2	3	7
小　倉	2	5	5	5	6
作　田	3	2	2	0	2
太　田	1	0	0	0	0
柳　本	8	3	8	6	4
前　田	3	1	2	2	3
豊　田	2	3	0	1	0
田中秀	0	4	0	0	1
横　地	2	3	1	1	0
畠　中	3	1	0	1	0
四　宮	2	0	0	0	0
比　嘉	3	1	1	0	4
田中勝	2	0	0	0	0
窪小谷	1	0	6	4	4

練習試合

選手名	SUNGUL	GEZIRA	SKIF−1
澤　田	2	1	2
小　倉	0	0	3
作　田	0	0	0
太　田	1	0	5
柳　本	5	1	1
前　田	3	0	0
豊　田	0	4	3
田中秀	1	0	0
横　地	1	1	0
畠　中	2	4	0
四　宮	0	3	0
比　嘉	6	−	0
田中勝	0	0	0
窪小谷	0	0	0

のミドルなどで得点されて、U−23も小倉のステップやミドル、柳本の速攻、窪小谷のポストで反撃するも、追いつかず大差で敗れた。

〈8月31日〉

U−23（全日本学生候補）　31（15−14／16−13）27　GEZIRA−CAIRO

開始早々、ディフェンスのマークの甘いところをつかれて、SERYのポストシュートを決められ、さらに、パスミスを拾われて、FATHJのシュートを許したが、小倉、前田のミドル、相手のシュートミスを柳本の速攻に結びつけ追いつき、その直後の７ｍ、ノーマークシュート２本を高木の好守で阻み、その後は、常に１点のリードをキープして、前半を終了。後半、GEZIRAは、左腕エースGALALを中心に、ポストのSERYを絡ませた攻撃で、粘り強く迫ってきたが、後半10分、19−16の時に、澤田が７ｍを決めて抜け出し、以後、要所要所での高木の好キーピングもあって、日本ペースで進み勝利を手中にした。

【練習試合】

〈８月29日〉（60分試合）

U−23（全日本学生候補）　21−31　SUNGUL（ロシア１部リーグ前期10位）

※30日の練習試合は、合同練習もありスコアなし

〈９月１日〉（30分試合）

U−23（全日本学生候補）　14−13　SKIF−ROSNEFT＝1

U−23（全日本候補）　15−10　GEZIRA−CAIRO

ロシア遠征を終えて

日本体育大学　**高木　尚**

今回の合宿には全力で、特にトレーニング、ゲームだけでなく、私生活、コミュニケーションの充実もさせたいと思い遠征に参加しました。

実際に外国人とゲームを行いましたが、まず一番に実感したのは、自分たちは日本で他の学生相手に試合をしていますが、試合をするために一番必要な気持ちの持ち方の甘さを実感しました。それぞれ毎日ゲームをしましたが、自分たちの持ち味である速攻が決まりだすということは、ディフェンスが波に乗っていていくらロシアリーグ２位、５〜８位の相手とやっていても全く受け身にならないくらい良かったです。

しかし、チームとして目立ったのはイージーなミスの多さ、キャッチミス、パスミス、ノーマークのシュートミス、ディフェンスでの簡単なミスなど、本当にイージーミスの多い試合ばかりでした。なぜかと思ったが単純に日頃仲が良いが、ハンドボールをやっている時のコミュニケーションが取れない、練習を練習で済ませていること、外国人とやっているという自覚が少ないこと、だから試合で自分が今までにしたことのないようなミスや、練習ではしないミスをゲームでしてしまうのです。

「誰かがやってくれる」という気持ちがみんなにある。これが少しでも「自分の力で…」と思えてきたらチームが強くなると思いました。

国士館大学　**澤田俊祐**

今回の遠征についてー。今回の遠征はロシアということであったが、ロシアという国は今まで見てきた中で、力強い速攻というのがイメージにあったが、まさにその通りで、ディフェンスからの速攻に力強さを十分に感じとることができた。昨年はドイツでの合宿ということであったが、ドイツの時は、ほとんどのチームが０−６ＤＦであった。そのためＯＦ時のボール回しはスムーズに行えていたように感じていたが、今回のロシアでは、ほとんどのチームが５−１ＤＦであったためか、ＯＦ時にボール回しの時点からミスが目立ち、プレスぎみのＤＦに対しての対応がうまくできていないように感じられた。

全体的にみると、１戦目で大勝したせいか、その後の３試合はあまりピリッとしないゲーム内容であったが、練習試合の２戦目では前日大量失点した相手に、失点を少なく抑えることができ、自分たちの反省点をミーティングで確認し合えたということに、少し手ごたえを感じることができた。チームは日がたつにつれて、声が出だし、ゲーム中・外での話し合いも増え、雰囲気はよくなっていったように感じた。しかし、気持ちの切り替えという点では課題が大きく残っていた。

第25回日本ハンドボールリーグ審判団


【北海道】小笠原久郎


【東北】大沢由和


【東北】佐藤睦朗


【東北】工藤里花


【東北】外舘由美子


【東北】多田和生


【東北】中舘　豊


【東北】中島昭博


【東北】谷藤節雄


【東北】齋藤仁宏


【東北】田川卓史


【関東】後藤　登


【関東】清水宣雄


【関東】浜田浩和


【関東】仲田　稔


【関東】植村　彰


【関東】小林一夫


【関東】土屋雅男


【関東】大出治男


【関東】小西正寿


【関東】山本興道


【関東】菅田信也


【関東】江原秀一


【関東】永春文義


【関東】福田　弘


【関東】冨田　拓


【北信越】浜野大助


【北信越】阿部羅大造


【北信越】山口弘夫


【北信越】岩上浩一郎

第25回日本ハンドボールリーグ審判団


【北信越】田中宏育


【北信越】佐々木昭彦


【北信越】藤井善彦


【北信越】竹野誠司


【北信越】大石克哉


【北信越】桜打佳浩


【北信越】高田和英


【北信越】田村裕志


【東海】楓　健児


【東海】渡辺貞彦


【東海】岩本晃寿


【東海】坪井雅典


【東海】浅野幹也


【東海】神谷真次


【東海】木和田浩史


【東海】河合千丈


【東海】根来英介


【東海】青木英樹


【東海】細沢　覚


【東海】清水保雄


【東海】船谷真和


【東海】丸山竜司


【近畿】小山　勉


【近畿】佐路清隆


【近畿】浅井隆志


【近畿】岸本光夫


【近畿】家永昌樹


【近畿】丸谷謙二


【近畿】奥田政俊


【中国】藤井俊朗

第25回日本ハンドボールリーグ審判団


【中国】大熨嘉彦


【中国】池田尚美


【中国】久保　博


【中国】高　俊文


【中国】奥川和永


【中国】原井　進


【中国】角　直樹


【中国】加藤　晃


【中国】岡村尚明


【四国】武智誠治


【四国】松原誠起


【四国】中川利彦


【四国】岡本憲和


【九州】仲里　貢


【九州】中地健三


【九州】新荘悌男


【九州】水上秀憲


【九州】別府志朗


【九州】押川幸廣


【九州】福島亮一


【九州】石原口秀樹


【九州】渡邉正徳


【九州】龍　弘美


【九州】貞島早苗


【九州】田中靖浩


【九州】江口典秀


【九州】金子弘明


【九州】児玉浩三郎

第５回 ＯＢ登場!!

第５回は東大ＯＢ河内さんにご紹介頂いた京大ＯＢのこの方にご登場いただきます。



本 田 勝 亮 さん
（ほんだ かつあき）

1937年1月14日生

京都大学ＯＢ。大阪府出身。ＧＫとして府立豊中高校でインターハイ、国体に３度出場。３年次の藤井寺インターハイでは準優勝しベストイレブンに選ばれた。京大経済学部へ進み、学生リーグで活躍する一方、豊中高ＯＢとして全日本総合に出場。大阪クラブで国体優勝も経験。旭化成工業株式会社に入社。大阪府池田市に住まわれ、趣味はゴルフと美術鑑賞。現在京都大学ハンドボール部ＯＢ会長・関西学連監事・池田市ハンドボール連盟副理事長を務める。

――― ハンドボールとの出会いについて教えてください ―――

私のハンドボールとの出会いは小学校６年生のとき。大阪学芸大学（現・大阪教育大学）の付属小学校に在学していましたが、教育実習に来ておられた教生に、後に大阪でハンドボールをしている子供にはよく審判をしてもらっていたためエンシン（遠審）の名で親しまれた遠藤信三先生がおられ、体育の時間にハンドボールを教えていただきました。当時は好きなスポーツと言えば野球か相撲。何でこんなスポーツをやらされているのかと不満だったのを覚えています。

中学に入って、何か運動部に入るかと考え、私よりどう見ても巧い奴が大勢いる野球部は敬遠。部が存在しており少しでもやったことのあるハンドボール部に入部しました。それが病みつきの始まりです。ポジションは生来の鈍足故、あまり走らなくても良さそうなＧＫにしてもらいました。大阪府の大会に何度も出ましたが、成績は大したものではなかったと思います。

――― その後、豊中高校―京都大学と進まれました ―――

豊中高校では、当時日本協会の副会長だった馬場太郎先生がおられ、豊高ハンドボールの全盛期でした。関関同の大学に進んだＯＢ諸兄にしごかれ、上級生に今西金幸・村上正・八田昌三さんたち、同級生に深江幸次郎・村中明郎・草井由博君たち、いずれも球界に名を留めた人達と共に、苦労はしましたが充実した日々でした。大阪府下には敵なく、私の記憶が正しければ在学３年間で２敗しかしていない筈です。２年生の今治国体では３位、３年生のインターハイ、函館での国体では桜台・済済黌に敗れ共に準優勝でした。

京都大学では、１回生のときは試合に行く部員数もままならない３部のチームでしたが、２回生秋のリーグの入替戦で勝って１部に昇格し、第２回インカレでは当時全盛で優勝した芝浦工大に準決勝で接戦の末敗れ４位。リーグ戦では３回生の秋、どうしても勝てなかった関関同の一角関西大学に延長の末勝って８位になったのが最高位でした。東京大学、慶應義塾大学とは年１度の定期戦を持っているのですが、東大には４連勝。慶應には９連敗を阻止して２勝２敗でした。また３回生のときには、水俣で行われた全日本総合に豊中高ＯＢの豊稜会で出場し、たしか３位。大阪クラブの一員としては東京国体で優勝と、私の現役生活で最良の年でした。

――― 当時のハンドボールはどのようなものでしたか ―――

学生では東で芝浦工大・日体・早稲田・立教、西では関学・関大・同志社の３校などが強く、社会人は出身母校や教員を中心のクラブチームが主体となっており、大阪クラブは最強チームの１つで大阪近郊でハンドボールをしている者にとって、このチームに加わることは名誉なことでした。11人制がほとんどの試合形式でしたが、確か私が高校のときに７人制が導入され、大阪では府の大会もありプレーしたこともありました。

――― ハンドボールを通して忘れられない思い出はありますか ―――

心に残っている試合はたくさんあるのですが、ほとんどが負け試合。その中ではなんと言っても高校３年、函館国体の決勝戦で済済黌に敗れた試合です。前日の準決勝、我々がインターハイで敗れた桜台が同校に負け、今度こそはと試合に臨んだのですが、結果は９対６での負け。この試合で済済黌の竹野奉昭選手に全得点の９点を入れられたＧＫがかくいう私。随分悔しい思いをさせられました。何年かのち、文藝春秋を見ていたら「同級生交歓」のページに広島カープの古葉監督と当時全日本監督だった同氏が載っておられ、この全得点に言及があり、なんだか悔しいというより懐かしい思いをしました。

――― 今のハンドボール界に何かひとつ提言をお願いしたいのですが ―――

現在私は少しでもお役に立てればと関西学連監事と地元池田市の連盟で副理事長を務め、若い世代の面倒を見させていただいてますが、今回も五輪の出場権を逃したこともあってかハンドボールに関心を寄せる人の数があまりにも少な過ぎる。学生リーグのチームでも人数あわせに苦労するチームが時折あり、小学生を教えている池田市でも年々希望者が減っている状況です。裾野を広げる組織作りを全面的に図るとか、強力なマスコミ対策を行うとか、何らかのインパクトのある施策を打ち出す必要があるのではないでしょうか。

貴重なご意見ありがとうございました。次号もお楽しみに。

熱く燃えるリーグにしよう

企画・広報委員
早川　文司

Free Throw（フリースロー）

シドニー・オリンピックが終わり、競泳、野球、柔道、女子ソフトボールなどファンを沸かせたが、その熱風もようやく一段落した感じだ。ハンドボールがその場にいなかったのは、なんともむなしかったが、そのためにも４年後のアテネ大会には是が非でも復活を果たして、多少なりとも今回の悔しさを半減したいものである。

25年目の日本リーグが開幕した。不況からのチーム存続の危機はなくなったわけではないが、なにより大切なことは、各チームの選手たちのコートでの熱いプレーではないだろうか。

ところで、シドニー五輪でも指摘されたが、ボールゲームの出場が少なかった。アジアでの争いがそれだけ激しくなったことも一因だろう。あるいは世界の壁が厚くなったともいえるだろう。バスケットボール界も今、ハンドボール界と似たような環境にある。

名門チームの相次ぐ休廃部によるリーグ撤退、さらにはシドニー五輪への出場権獲得の失敗…。これは他人事ではすまされない。事情は多少違うことがあるとはいえ、身につまされる話である。

ハンドボール界でもいろいろな試みで盛り上げを図っているが、現状はまだ、それほどの効果は上がっていないようである。

そのバスケットボールリーグが男子の名称を「スーパーリーグ」と名付けることになった。実施は2001年からだが、今シーズンは「プレスーパーリーグ」と位置付けて戦っている。

厳しい現実への苦肉の策といえなくもないが、ホームタウン制を敷き、企業だけに頼らず、Ｊリーグの基本理念である地域に根ざしたリーグを目指している。

ホームタウン制を導入することによって、地域密着型をより鮮明にし、さらにはリーグの試合と並行してその地域の子供たちを対象にバスケットボール教室を開くことも検討している。これは将来をにらんだものであることもあるが、やはり危機感がそうさせたものでもあろう。

果たしてこの新しい試みがバスケットボール人気をどこまで取り戻す効果が現れるか、再び飛躍できるか、大いに注目されるところである。

バスケットボール同様に、ハンドボール界を取り巻く環境はなかなか厳しいものがあるのは、皆さんもご存知の通りである。過去にとらわれず、斬新なアイデアでもっともっとリーグが盛り上がる対策を講じることが、生き残りをかける重要なポイントでもあるのではないだろうか。

これまでのように「企業におんぶに抱っこ」の時代は過ぎた。新しい日本のスポーツ界創造へ今はどの競技団体も模索している。そうしたことからも、地域との密着、触れ合いは避けて通れない大きな課題であろう。そのためにも日本リーグ勢に「面白い」「感動した」と言われる熱い戦いをお願いしたい。

連載 7

NTS(ナショナルトレーニングシステム)指導者としてのあり方、役割

NTS運営委員長 蒲生晴明

《常に子供たちのよい手本であること》

スポーツは遊び心から生まれた文化です。当然、ハンドボールも「いつでも、どこでも、誰とでも」楽しめるものであるべきです。指導者は、まずハンドボール競技の楽しさを教えることが大切であり、選手のサポートを行っていくことこそ、その役割があるのです。

選手自身は指導されたことをひとつの情報として捉えます。ゲームの局面において、自分自身で瞬時にベストパフォーマンスを判断していくことで、競技の楽しさを味わい育っていくのです。一般的に「監督の指示どおりプレーしろ！」などと一方的な指導する場合、選手は、監督・コーチの「ロボット」にすぎず、将棋にたとえて言えば、単なる「駒」に過ぎなくなってしまいます。一方、様々なゲーム局面で習得した情報に、それまでの経験を加え、独自のアイデアをプラスしたオリジナルプレーを発揮する場合があります。この時こそ選手は、将棋でいう指手となり、本当の上達を確認し、自信につなげていくものです。

このようなプレーを導き出すためにも、選手一人ひとりが、指導された情報をもとに自分自身のポリシーを持つことがとても大切になってきます。そして、常に「考えながら」プレーするスタイルを構築していくために、指導者は選手にとって一番理解のあるサポーターであることが必要とされるのです。

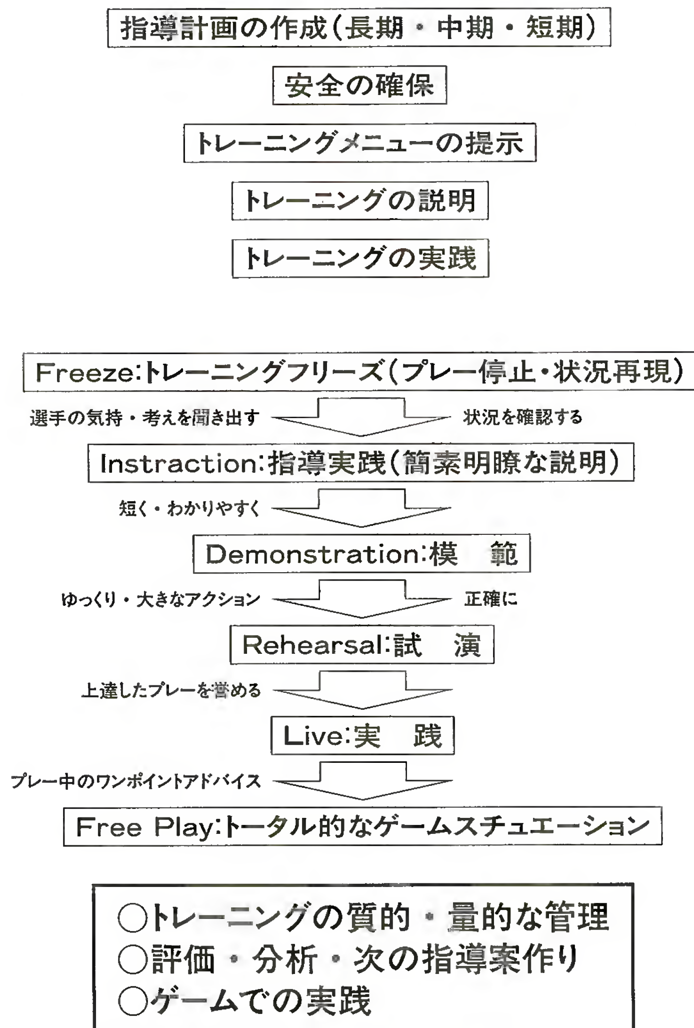


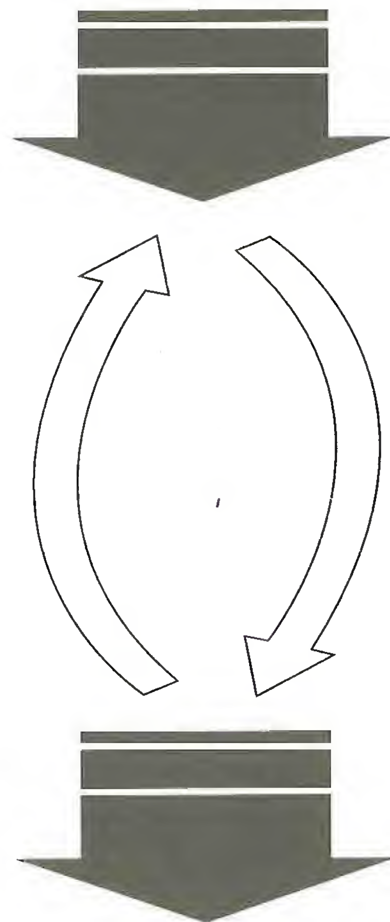
1 指導者の心得（以下のことを留意し指導にあたろう）

- 誠実で信頼される人柄であるように心がけよう。
- 教育的・指導戦術的・勝負的それぞれの側面から常に課題に向かっていこう。
- 指導に打ち込める環境を作ろう。
- ハンドボール競技の知識を深めよう。
- 指導方法を学習し、指導能力を積極的に磨こう。
- 情熱・ロマン・信念をもって進もう。
- 教養を身につけよう。
- 公認指導者資格を取ろう。
- ハンドボール競技を育てよう。
- 勝負の楽しさ、厳しさを教えよう。
- 厳しさと寛容さを持とう。
- スポーツマンシップを育てよう。
- 指導したいことを明確に伝えよう。
- 積極的な行動ができるような環境を作ろう。
- 自立した人間を育てよう。
- 学習・スポーツの両面を図れる指導者になろう。
- プレーヤーからアイデアを引き出そう。
- プレーヤーの長所を伸ばそう。
- コミュニケーションを大切にしよう。
- のびのびハンドボールができる環境を作ろう。
- 長期的な視野に立った指導をしよう。

2　指導者の仕事

指導者の仕事は、ただ単に技術的な面を指導するばかりではありません。その仕事は多岐に渡っており、日々の繰り返し、積み重ねが重要になっていきます。





3　マネージメント

1日、週間、月間　年間といったスケジュールの管理や目標設定など、選手のモチベーションを高め、維持していくことも指導者の大切な役割であり、安全を配慮した用具器具のメンテナンスなど細かな点も、指導者には要求されます。そして大会への参加、遠征、合宿などを考えた場合、財政的な管理力も問われ、全般的なマネージメント能力も大切になってきます。



◎スケジュール管理
◎目標設定
◎用具器具の準備
◎組織つくり（地域・学校）
◎チーム運営（財政・ＰＲ）
◎選手の管理
（成長・性格・気質・栄養・休養・ケガへの対応）
◎地域・クラブの実情に応じた良い関係づくり
◎保護者との連携
◎教育

医科学委員会報告

全日本チームのメディカルサポートの現況

―メディカルチェックからみたスポーツ傷害と問題点―

医科学委員長　西山　逸成

全本各種別チームの大会、海外試合および強化合宿等には、ハンドボール競技種目の委任を受けたスポーツドクター（整形外科、内科、歯科）およびスポーツトレーナー（理学療法師、柔道整復師、スポーツトレーナー他）により年間１～２回の各種別チームのメディカルサポートを実施し、チームの競技力向上のためのコンディショニングを担当している。

本年度は、シドニーオリンピック大会出場資格、2002年度世界選手権の出場資格取得をそれぞれ目指した大会出場が多かったので、年度当初からメディカルサポート群にドクター、トレーナーを増員した協力態勢で実施した。

本年度の年間サポート計画日数（細部は機関誌No.410、2000年８月号参照）は総日数331日間をドクター24名、トレーナー22名で担当予定とした。総日数の内訳は大会100日間、合宿231日間であり、各種別チーム担当は、ドクター数名のグループ、トレーナーは専任制（ナショナル男子、ナショナル女子）とグループ制とに区分した。

以下、本年度（１月～８月）のメディカルサポートとして各チームに実施したメディカルチェックの現況と問題点を紹介する。

１．メディカルサポートの現況・問題点（表１）

（１）現況

チームへの帯同単位は、ドクターとトレーナーを組編成（原則は固有組合せ）とした。帯同期間の基準はトレーナーは全期間、ドクターは１週間から10日前後が実際期間であった。

（２）問題点・要望（表１報告書から）

ア．チーム帯同ドクターは整形外科医のみでなく、季節の特性や派遣国・都市の衛生環境を考慮し内科医の派遣も考慮する必要があろう。

イ．前項の特性を考慮しドクターバッグの量を増やし現地で氷が手に入らないときのために傷害にアインシング用のコールドパック等を付加して準備する必要があろう。

（３）メディカルチェックレポート（表２）

メディカルチェックレポートによるスポーツ傷害を男子ナショナルチームの選手28名中から継続受診した15名を対象に2000年１月～８月の間に実施した結果からその概要を要約した。

対象者15名中、本年度健常を継続した選手は１名のみであった。

ア．身体部位別：

疾患数の多い身体部位は、足関節・足部、肩、膝、および手・指であり、疾患区分別状況は表３のとおりである。

表2メディカルチェックレポートによるスポーツ障害（スポーツ外傷・スポーツ障害）・疾患概況（ＮＡ男子）

部位	選手名	T・A							T・T							N・T							H・Y						
	M/C実施	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7
頭部	顔面																												
	口腔歯																												
上半身	肩															B-2					B-2	B-2						B-1	
	背部																									B-1			
上肢	上腕																												
	肘													B-2	B-2														
	手指																		B-1										
下半身下肢	腰部								B-1		B-2																		
	膝																		C-1		B-2	B-1	B-1						
	臀部																				右・左		B-2						
	大腿																												
	下腿																									B-1			
	アキレス腱																												
	足関節・足部																B-1		C-2		C-1	C-2	B-1						
異常なし		A	A	A	A	A	A	A		A		A																	
合計																													

部位	選手名	T・S							S・Y							S・T							Y・O					
	M/C実施	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6
頭部	顔面	B-1																										
	口腔歯																											
上半身	肩	B-1	B-1	B-2	B-1			B-1																				
	背部																											
上肢	上腕																B-1											
	肘																											
	手指				B-2		B-2	B-2																	B-2			B-2
下半身下肢	腰部																							B-1				
	膝								B-1			C-1		B-2	B-2													
	臀部																											
	大腿																											
	下腿																		B-2									
	アキレス腱															B-1												
	足関節・足部				B-1			B-1				B-2				B-1	B-1	B-1			B-2	B-2			B-1			
異常なし										A													A			A		
合計																												

イ．疾患分類別：

自己管理（AおよびB１）でスポーツ運動を継続してもよい選手は３名（T・A、H・Y、T・Y）に過ぎない。その他12名の選手は注意（B２）区分であり、スポーツ傷害の予防や回復のためには指導者、スタッフの指導、監督が必要となる区分である。

しかしながら、ナショナルチームの指導スタッフは対象選手全員を年間を通じて管理しているのではなく、せいぜい100〜120日間（年間の1/3期間）がナショナルチームの活動期間であるので、むしろスポーツ傷害の管理者は各選手の所属チームのスタッフといえる。

疾患区分C１（精査）、C２（治療）は医師の判定による大会の出場や合宿参加の制限・中止であり、15名中次の５名に長期間ハンドボール競技によるスポーツ傷害（スポーツ外傷・スポーツ障害）がみられる。

N・T	膝	左膝棚障害（C-1）
	足関節・足部	足根管症候群（C-2）
S・Y	膝	左ジャンパー膝（C-1）
O・K	腰	腰部椎間板ヘルニア（C-1）
T・T	腰	腰痛症（C-2）
T・Y	膝	右膝内障

N・T選手は10年有余全日本チームのエースとして国際的にも評価の高い選手であるが、文字どおり満身創痍のエースといえる。

2．メディカルチェックからみた処置対策の方向

N・T選手の2000年１月から８月までの８ケ月間の４回のメディカルチェック結果にみられる疾患部位は、肩、手指、膝、臀部、足関節・足部と全身にわたっている。その背景には、諸疾患が初期段階において完治し得ないままスポーツを継続せざるを得ない現状が推測できよう。スポーツ傷害の疾患をもたない選手で全日本チームを編成できないかという問題は以前から指摘されていた。

（１）ナショナルチームのメディカルサポートの体制の確立

ナショナルチームの「専任ドクター・専任トレーナー制」の継続実施に他ならない。幸いにも日本ハンドボール協会が編成している８チーム（全日本男・女、U－23男・女、U－19男・女、U－16男・女）のうち全日本男子はシドニーオリンピック強化期間の４年間は、加藤公ドクター、赤尾和彦、小松雅樹トレーナーで一貫したメディカルサポートを実施した。全日本女子は、トレーナーのみ専任とし、ドクターは佐久間克彦ドクターを基本に４名のドクター群で交互担任した。他の６種別チームはドクター・トレーナーともに同一所属を基本グループ編成とし、各グループに調整責任ドクターを設け、それぞれのチーム責任者と連携をとってドクター・トレーナーのチームに帯同を依頼した。

U－16からナショナルチームまでの一貫したメディカルサポートが望まれる。

（２）チームスタッフにフィットネススタッフの配置

男子全日本チームのメディカルチェック現状（付－２）

記号	区　分	期　日	場　所
①	合　宿	1.29／00	熊　本
②	合　宿	5.26／00	鈴　鹿
③	JOC M/C	6.6／00	日体協
④	ジャパンカップ	7.27／00	広　島
⑤	合　宿	8.3／00	鈴　鹿
⑥	WCG予選 東アジア選手権	8.9／00	上　海
⑦	東アジア 第３代表決定戦	8.25／00	バンコク

整形外科疾患区分（付－１）

分　類	管理者	スポーツ程度
A　（正常）	なし	継　続
B－1（観察）	自　己	継　続
B－2（注意）	指導者	継　続
C－1（精査）	医　師	継　続（制限）
C－2（治療）	医　師	中　止

T・S						K・K							O・K							K・Y							K・K							S・M							T・Y							小　計					
2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	疾患数	疾患区分				
																																																	A	B-1	B-2	C-1	C-2
																												B-1																				1		1			
		B-1																																														2		2			
						B-1															B-1	B-1	B-1		B-1	B-1																						15		11	4		
B-1		B-1				B-1																																										5		5			
																																																1		1			
						B-1																																										4		3	1		
B-1									B-1																		B-2																					11		4	7		
														C-1		B-1		B-2	B-1																					B-2				B-1				9		5	3	1	
						B-1						B-2										A																						C-1		B-1	B-1	14	1	7	4	2	
		B-1		B-2																																												3		2	1		
											B-2	B-2																																				2			2		
																																																2		1	1		
																																																1		1			
		B-1		B-1	B-1	B-2					B-2												B-2		B-2	B-2	B-1		B-1			B-1	B-1							B-1								27		16	8	1	2
	A																													A																		14	14				
																																																111	15	59	31	4	2

表1 〔ハンドボール全日本チームに対するメディカルサポートの現状・問題点〕

チーム名	大 会 名	期 間	場 所	帯同Dr・帯同Tr	処 置 記 録	問題点・要望
男子ＮＡ	シドニーオリンピック予選兼アジア選手権	2000.1.24 ～1.30(7)	熊本市	加藤 公Dr.	1.M/Cレポート	1.トレーナーの増員 選手睡眠時間減少
男子ＮＡ	ジャパンカップ 合 宿	2000.7.27 ～7.30(4) 2000.5.25 ～5.26(2)	広島市 鈴鹿市	加藤 公Dr. 加藤 公Dr.	1.M/Cレポート 1.M/Cレポート	1.中山選手の精査他
男子ＮＡ	JOC・M/C	2000.6.6	スポ研	河野卓也Dr. 青木義広Dr.	1.M/Cレポート	
男子ＮＡ	合 宿	2000.5.22 ～8.16(47)	鈴鹿・大崎・紋別・湧永・広島 7/27 鈴鹿・上海	小松雅樹Tr.	1.加藤Dr. M/Cレポート	1.コーチ・マネジャーの増員 2.選手の長期一貫指導
男子ＮＡ	合 宿	2000.8.3 ～8.6(4)	鈴鹿市	加藤 公Dr.	1.重傷度の高い選手 2～3名(プレー可)	
男子ＮＡ	世界選手権 東アジア予選	2000.8.9 ～8.16(8)	上 海	河野卓也Dr. 小松雅樹Tr.	1.M/Cレポート 内科疾患多発(下痢) アイシング用氷入手困難 コールドパック使用	1.DrBagの付加 ロペミン、ブスコパン アイシング機材付加
男子ＮＡ	WCGアジア 第3代表決定戦	2000.8.23 ～8.29(7)	バンコク	加藤 公Dr.	1.下痢多発(上海) 2.M/Cレポート	1.水分・食事管理
男子U-23	合 宿 ロシア遠征	2000.5.26 ～5.28(3) 2000.8.26 ～9.3(9)	大 崎 ロシア	沖本信和Dr. 沖本信和Dr.	1.M/Cレポート	
男子U-16	台湾遠征	2000.8.25 ～8.29(5)	台中市	中田俊博Tr.	1.M/Cレポート 足関節捻挫 3名 シンスプリント 4名 腰痛 2名 osgood-schtateer 1名	1.鎮痛 2.機能改善
女子ＮＡ	合 宿	2000.7.20	ブラザー工業	島田信弘Dr.	1.M/Cレポート	
女子U-23	フランス遠征	2000.6.11 ～7.6(25)	フランス	酒井 薫Dr.	1.慢性的外傷 2.M/Cレポート	1.選手の外傷予防知識の設定 2.事前の現地食事情報の入手 3.内科的チェックの必要性
女子U-23	第4回 世界学生選手権大会	2000.6.24 ～7.5(12)	フランス クレルモント フェラン	天門永春Dr.	1.M/Cレポート	1.選手補強におけるM/Cサポートの必要性 2.大会直前のM/C早期実施(土・日・休日) 3.Dr. Bag付加(シーネ)

チームのドクター・トレーナーは、選手のコンディショニングの中の治療段階が主担任であり、現状の疾患区分ではＢ１（選手の自己管理でスポーツを継続実施）およびＢ２(指導者の指導監督下で継続実施)が主体(94.5%)を占めている。一方フィットネススタッフとは、スポーツリハビリテーション分野でドクター・トレーナーと連携し、回復能力よりもむしろ予防的見地からの改善を担当するものである。このような競技力としての体力づくりのできるフィットネストレーナー（トレーニングドクター）を編成員として常時帯同する必要がある。(加藤公、河野卓也、福田亜紀、天門永春、島田信弘、沖本信和、小松雅樹、酒井薫、中田俊博)

表3 身体部位別疾患

	B-1(観察・自己管理)	B-2(注意・指導者)	C-1(精査)	C-2(治療)
足関節・足部	足関節捻挫 足根管症候群 母趾ＭＰ関節捻挫 アキレス腱炎症 足関節三角骨障害	母趾外転筋肉離れ 小趾捻挫 踵部痛 足部捻挫		足根管症候群
肩	肩痛 肩鎖肉筋捻挫 肩インピンジメント症候群 投球肩障害	肩鎖関節脱臼 投球肩障害 肩関節唇損傷 肩関節唇損傷		
膝	ジャンパー膝 膝前十字靱帯再建術後 膝外側半月板損傷 膝内障	膝半月板切除後水腫 ジャンパー膝	膝内障 ジャンパー膝	
手・指	右手関節損傷	中指ＭＰ関節捻挫 環指つき指（陳旧性） 小指靱帯断裂		

2001年男子世界選手権東アジア予選（ドクター報告）

横須賀共済病院整形外科　河野卓也

2000年8月9日から16日まで、中国（上海）で開催された世界選手権東アジア予選にドクターとして帯同しました。私は6月6日に日本体育協会スポーツ診療所でメディカルチェックを実施してからチームには帯同していませんでした。しかし、広島国際大会および直前合宿に帯同した加藤先生から選手の状態の連絡を受け、また大会前からトレーナーとして活動していた小松さんからも情報を受けたので、スムースにメディカルサポートができたのではないかと思います。

8月9日に関西空港で選手団と合流し、数日の間に全選手をメディカルチェックしました。その結果、男子16人のうち15人に25件の疾患（スポーツ外傷・障害）がありました。25件のうちほとんどが評価（重症度）はB－1またはB－2の軽症で、テーピングなどでプレー可能な状態でした。1人の選手は左足根管症候群と左膝棚障害の症状が強く、C－1と評価しましたが、プレーは可能な状態でした。

大会期間中は、強化合宿と違って長時間およびハードな練習はしないため、上海で大きなけがをした選手はありませんでした。しかし、下痢が大流行し、体調をくずした選手が多数いました。下痢の原因はホテルの中華料理の油と、焼き肉ではないかと思われますが、同じ食事で下痢をしなかった選手もいるので断定はできません。ドクターバッグに入っていた下痢止めの薬（ロペミン）を使いきり、さらに個人的に持っていたロペミン20錠も使いきり、最後は女子に帯同していた坂口先生からロペミンを分けていただきました。1人の選手に点滴をしましたが、下痢のためプレーできないという選手はいませんでした。

また、アイシングのための氷が手に入りにくく、トレーナーの小松さんとともに苦労しました。ホテルのレストランで氷をもらっていましたが、数か国の男女選手団が同じホテルに宿泊していたため、毎回わずかしか氷をくれません。製氷器が小さく、たくさん氷ができないということでした。近くにスーパーやコンビニはありましたが、氷は売っていません。そこで女子に帯同していたトレーナーの皆川さんに、コールドパックを貸していただきました。

今大会は男子も女子も同じホテルで同じ試合会場だったので、女子に帯同していたドクター、トレーナーと連携がスムーズにできたと思います。坂口先生、皆川さん、ありがとうございました。

第8回アジア女子選手権大会

皆川直哉

8月8日に福岡を発ち、11日間のアジア選手権大会が始まりました。その直前の合宿から考えますと、計33日間（途中広島ジャパンカップあり）の長期にわたる練習・試合は選手・スタッフの顔から笑顔を奪うことになる程のことでした。しかしながら、大会2位という結果をもって、その労苦も報われたという次第でした。当初の目的通り、世界選手権へのキップを手に入れることが大前提でありましたので、その意味では目的は達成。しかし、韓国には今一つのところで勝ちを逃す結果となり、念願のアジア制覇には一歩及びませんでした。

そんな中、選手達は、ケガやアクシデントを乗り越えて堂々と戦ってくれ、とてもたくましく思えるようになりました。

合宿当初は、選手の自立をうながす意味からスタッフの対応に変化が見られ、これに選手は困惑することしきり。精神的にもつらかったことと思います。

合宿からジャパンカップへと、ゲームに移る頃から選手の開き直りを感じゲームを重ねるごとに“甘え”から脱皮するキッカケがつかめたようでした。徐々に戦うモチベーションを自分でコントロールすることにより、ゲームで発揮することができるチームになってきたことを感じます。一人一人はトップレベルの選手である訳ですが、女子スポーツ、特に団体競技では仲間・先輩への依存心や遠慮が多々見られます。そんな弱気を一掃することができるメンタルタフネスの追求が目的だったのですから、その第一歩を着実にものにしたことと思われます。

身体的な面では、ゲームごとに何らかのケガは発生しますが、対処できない症状もなく基本的な日常のトリートメント、ケアをすることでコンディショニングを維持することができました。今回のナショナルチームは、選手自身がトリートメント、ケアを積極的に取り入れる習慣が大分ついてくれましたので、プレーにおけるパフォーマンスをレベルダウンすることなくゲームに臨むことができ、まずは夜遅くまでほぼ年中無休状態で取り組んだ甲斐がありました。

現地でのエピソードとしては、キャプテンの青戸選手がカゼで高熱を出すこともなく無事でいてくれたこと、と思っていたら足首筋の損傷や右手小指の靭帯の損傷というアクシデントに見舞われ、シュートするごとに不安を感じることが発生し、トレーナーとしては冷やっとさせられました。夜はトリートメントを指示どおりしっかり行い、練習中、ゲームではテーピングをし、全体を通し

て頑張ってくれました。

予後は忙しいと思いますがしっかりと処置し完治してほしいものです。

試合では田中美音子選手の状況判断の的確さ、少ないチャンスをものにする積極的なプレーは特に印象的ですね。見る者に安心感を与えるプレーは今後ナショナルチームが受けつがなくてはならない点でしょう。

また、唯一現役の高校生、谷口選手の途中参加も一味違った醍醐味をチームに与えてくれました。女性選手としては確かにビッグであり、これがしっかりと成長してくれたら将来が楽しみですね。そのためには弱点の克服をすべく筋力強化は絶対条件ですね。

今回の結果に対して、得たものを十分に実力として次のステップへと臨んでいきたいと思います。

私達は、チームと共に成長していきますが、チーム、選手も私達と共に成長してほしいと思います。

第6回アジア女子ジュニア選手権 （トレーナー報告）

ATHLETE SUPPORT 今井秀登

2000年7月25日～7月31日迄、バングラデシュの首都ダッカにおいてアジア女子ジュニア選手権が開催された。この遠征は、来年開催される、世界選手権の出場権を取るうえでも重要な大会であった。チームスタッフは、団長1名、監督1名、コーチ1名、ドクター1名、トレーナー1名、計5名で構成された。この、遠征期間中のトレーナー活動の内容を報告致します。

選手権1か月前の山梨合宿時に選手個別にチェックリストに沿ってメディカルチェックを実施し、その結果を参考にドクターと相談のうえケアーの内容を決めた。遠征出発前日にも、ケアーの必要と思われる選手のチェックを行い遠征期間中のケアー内容の確認をした。現地では、ホテルの私室をトレーナールームとして常時（試合、練習が午後からの場合は午前中と夜間、練習が午前の場合は午後と夜間）解放し、マッサージ及びストレッチ、PHF、筋力トレーニングなどを実施した。選手の状態としては、下肢疾患が多く、次いで肩、肘、腰の疾患であった。「肩が痛い」と訴える選手のほとんどがローテーターカフであり、インナーマッスルのトレーニングを指導、実施した。テーピングに関しては、試合、練習の開始時間に合わせ、トレーナールーム及び体育館で実施。テーピング実施件数は、期間中延べ件数で26件であった。部位では、足関節、膝関節、肘関節、手首、等であった。また、選手のほとんどが、ブレースを使用、テーピングと併用する選手もいた。

アイシングに関しては、アイスパックを人数分用意し、試合、練習終了後に各自実施した。以上の内容で選手をサポート致しました。また、今回の遠征では、ドクターとの連携がとてもスムーズに行えケアーに対しての適切な意見交換も行えた。

今回の遠征の一番の問題は、高温、多湿、食文化の違いなどであったが、スタッフの協力と選手各自の自己管理で、無事のりきることができた。結果として、3位、来年度の世界選手権の出場権も獲得できた。

最後になりましたが、緒方団長、田中監督、平賀コーチ、宮本ドクター、そして現地のスタッフの方々のご協力を頂き、心より感謝致します。

私自身、いろいろと勉強させて頂きましてありがとうございました。

第6回アジア女子ジュニア選手権 （ドクター報告）

熊本赤十字病院整形外科　宮本和彦

2000年7月25日から31日までバングラデシュで開催された第6回アジア女子ジュニアハンドボール選手権に帯同ドクターとして参加したのでこれを報告する。

今回の選手団の構成は選手15名、スタッフ5名（団長、監督、コーチ、トレーナー、医師各1名）の計20名であり、選手の大多数は海外遠征歴があった。本大会は2001年ハンガリーで開催予定の世界選手権の予選を兼ねたものであり、今回は7か国が参加して行われた。2つのグループに分け予選リーグを戦い、上位2チームがそれぞれ決勝トーナメントに進んだ。グループAは韓国、台湾、インド、ネパールの4か国、グループBには日本、中国、バングラデシュの3か国がそれぞれ割り当てられた。

7月23日午前中に名古屋を出発し、Singapore Airlineにて約6時間のフライトを行った。この機内の空調

はブランケットを羽織ってもかなり寒い状態にあり、ここでうっかり眠ったら間違いなく風邪をひきそうなほどであった。現地には日本時間の深夜に到着し、若い選手らもさすがに疲労していたようだった。空港ではVIP専用の通路を通り、スポンサーらから手厚い歓迎を受けた。ホテルの送迎バスは一流ホテルにも関わらず、お世辞にもきれいなものではなく、明らかに他国で使い古されたもののようであり、この国の経済力を物語っていた。ホテルに着くまでのバスの中ではかなり強烈な体験をした。車の走行車線は2車線ほどあるが、車線変更は自分勝手だし、クラクションは鳴らし放題で走り、決して譲り合おうとはせず、我先にとどの車も走るため、急ブレーキやニアミスは頻繁にあり、ホテルに着くまでに生きた心地がしなかった。

翌日午前中に練習に出かけたが、このバス移動の際に銃を所持した警官が4人護衛のために乗り込んできたので重々しい雰囲気であった（これはその後も移動の際は毎度のことだった）。練習場は本大会会場であるシャヒード・ショーラワルディ国立屋内競技場で行った。これはダッカ市内で唯一空調設備及び観客席のあるものらしいが、中はフロアを含め余り整備されている様子ではなかった。長旅の疲れを心配していたが選手等は比較的体もよく動いていてたっぷりと汗を流していたので多少安心した。また、現地の新聞では今大会の記事が1面一杯に掲載されており、この国での関心の高さを感じた。

25日から大会が始まり、開会式ではマスゲームなどがあり雰囲気を盛り上げていた。グループBの日本は26日に初戦をバングラデシュと行い、格の違いを見せつけ44－10で快勝した。次の中国戦は前半から1点を争う緊迫した試合展開となり、後半残り5分頃に7mTを決め日本は同点に追いつき19－19のドローとなった。実はこの試合途中に得点に対しオフィシャルからクレームがあり先の結果となっていたが、翌日この判定は間違いであるとIHFから説明され18－19で中国に敗れた形となった。この結果、予選を2位で決勝トーナメントに進み、準決勝で韓国に33－14で敗れはしたものの3位決定戦で中国に25－16と雪辱して3位となった。この結果2001年の世界選手権の出場権を無事に得ることができた。

今回の遠征ではバングラデシュという国が亜熱帯モンスーン気候で高温多湿であること、食文化の違い、空調設備のある体育館が首都ダッカで1つしかなく、試合前のコンディション作りが難しいなど、かなり体調管理が大変であることが予想された。幸い重篤な感染症に罹患したり、重度の外傷を大会期間中に負った選手はいなかった。しかし、除湿のためにホテル内は常に空調を使用しなければならず、このため現地入りして2、3日後より上気道感染症状を訴える選手らが増加した。

食事はそのほとんどがホテル内で行ったため大きな問題はなかったようである。ホテルでの食事は毎食バイキングであった。ほとんど火を通した油っこい料理が多く、2日もすれば多少食べ飽きる感があった。当初はよく食べていた選手等も次第に食が細くなり、特にお米が合わない選手は日本から持ち込んだ補食でカバーしているようだった。消化器症状を訴えたのは意外にも1名のみであった。このように日本と環境がかなり異なる場所での遠征の際には、食生活に対する対策はもちろんのことであるが、感冒も含めた上気道感染などに罹患しないよう注意しこれを予防する必要がある。このためには食事の前にうがい、手洗いなど基本的な予防行為は不可欠で、これに加え選手各々にイソジンガーグル®などを所持させ、移動の際や食事及び練習の前後にもこれらを励行させる方がよいのではないかと感じた。

今回選手のメディカルチェックを試合の合間に行ったが、この年代の選手はまだ余り自分の身体のケアの仕方について十分知らない選手が多く、またスポーツ障害に対する認識の低さも感じた。これらは選手等の所属チームによってもその程度は異なるようだが、今後彼女らがもっと高い競技力を要求される場面に遭遇した際に、重度の外傷へと発展させないためにも各チーム内での定期的なメディカルチェックや外傷予防のためのトレーニング、故障した部位の定期的な治療などの必要性を感じた。また、今大会中にはドーピング検査は実施されなかったが、今後も選手等にアンチ・ドーピングに対する啓蒙を日々継続していく必要がある。

最後になりましたが今回このような機会を与えていただいたことに深く感謝するとともに、U－19選手の今後のさらなる飛躍を祈念しております。

平成12年度 C級コーチ養成講習会（専門教科講習会）報告

平成12年度財団法人日本体育協会・財団法人日本ハンドボール協会主催、公認C級コーチ養成講習会（専門教科講習会）が、平成12年7月28日㈮～8月2日㈬の6日間、名古屋市・ブラザー工業体育館で開催された。

日本ハンドボール協会は日本体育協会と協力して、公認コーチと公認スポーツ指導員の講習を行い、その養成を行っている。講習の目的は以下の点にある。

①ハンドボールを行っているチーム、クラブ、グループを対象に、競技における都道府県レベルでの基礎的・専門的なスポーツ技術の指導を行う。

②クラブ、グループ等活動組織の育成・指導に当たるものを養成すること。



コーチ資格はC、B、A資格があり、資格取得希望者は今回のC級資格から取得しなければならない。講習会全体は前期・後期の共通科目課程（共に4泊5日）、専門科目課程（5泊6日：基礎理論25時間、実技20時間、指導実技15時間）、レポート、検定試験から成っている。

共通科目講習は文字通り、ハンドボールに限らない様々な競技から受講者が集まる。前期・後期共に全国で6会場が設定されており、場所・日程に応じて会場を選択できる。各教科には講義（時には実技も）と検定試験があり、4年間ですべての課程を修了しなければならない。また、出身大学や大学での取得単位によっては免除科目が設定されている。

ハンドボール競技においては隔年で専門教科講習会を行っている。今回行われた講習会の内容を以下に記す。

公認C級コーチ養成講習会カリキュラム

（講師名敬称略）

第1日目

基礎理論	コーチの役割	（大西　武三）
基礎理論	ハンドボールの歴史	（水上　一）
実　技	集団技能	（水上　一）
基礎理論	世界の技術・戦術	（池田　修）
実　技	世界の個人技術・チーム戦術	（池田　修）

第2日目

基礎理論	ハンドボールの生理学	（田中　守）
実　技	体力トレーニング	（田中　守）
基礎理論	ゲームにおける攻防理論	（土井　秀和）
実　技	レベル別指導法	（土井　秀和）
指導実習	個人技能の指導	（笹倉　清則）
基礎理論	ハンドボールの評価法	（笹倉　清則）
基礎理論	ハンドボールの指導法	（小山　浩）

◀C級コーチ養成講習会参加者（専務理事を囲んで）

第3日目

基礎理論：指導案／指導計画作成　（曽田　宏）
実　　技：個人・集団技能　（曽田　宏）
基礎理論：現場における救急処置　（井上　良太）
実　　技：ハンドボールの傷害とその処置　（井上　良太）
指導実習：個人技能の指導　（笹倉　清則）
指導実習：年齢別指導方法（高校生対象の指導）　（滝川　一徳）

第4日目

基礎理論：ルールとレフェリング　（斎藤　實）
実　　技：ＧＫのトレーニング　（栗山　雅倫）
実　　技：動きづくりからチーム戦術まで　（藤本　元）
指導実習：個人技能の指導法　（笹倉　清則）
指導実習：年齢別指導方法（中学生対象の指導）　（佐藤　友紀）

第5日目

基礎理論：ハンドボールのバイオメカニクス　（清水　宣雄）
実　　技：ＮＴＳの指導法（動きから個人技能）　（蒲生　晴明）
実　　技：ＮＴＳの指導法（グループからチーム戦術）　（蒲生　晴明）
指導実習：個人技能の指導　（笹倉　清則）
指導実習：年齢別指導方法（小学生対象の指導）　（角　紘昭）
基礎理論：ルール変更の動向　（後藤　登）

第6日目

基礎理論：世界のハンドボールの変遷　（笹倉　清則）
基礎理論：他競技の指導方法
サッカーの場合　（松本　光弘）
基礎理論：コーチ論　（市原　則之）
検定試験

以上の内容で講習が行われた。講義・実技の両面から構成された講習は幅広い分野に渡り、基礎的且つ、専門的な内容であった。各参加者が今講習会で学び取った様々な知識を今後の指導場面で生かすと共に、後進の指導者を養成することが、結果的にハンドボールの普及発展に繋がり、さらには日本ハンドボール界の発展に繋がるであろう。

平成12年度第３回ハンドボール研究集会

ボール運動教材としてのハンドボール　―その３―

平成12年度第３回ハンドボール研究集会が、８月４・５日の２日間に神奈川県立体育センターにおいて開催された。

新学習指導要領をうけて、学校体育における効果的なハンドボールの授業の可能性について、全国から多くの研究者が本研究集会に参加した。以下にその概要を記す。

８月４日㈮

［開会式］

挨　拶	㈶日本ハンドボール協会	副会長	中澤　重夫
	神奈川県ハンドボール協会	副会長	佐分　正典
趣旨説明	第３回研究集会実行委員会	委員長	川邊　孝夫
日程説明	第３回研究集会実行委員会	運営委員長	石川　泰弘

(大会趣旨)

平成10年度発表された小学校新学習指導要領に、ハンドボールが「ボール運動」として初めて採用された。このことは、学校体育において、児童や生徒の体力・運動能力の低下が指摘されている昨今、ハンドボールが、子どもたちの発育・発達を促すのに適していること。加えて、他のボール運動より、教材づくりや戦術学習が容易なこと。さらに、小学１年生から６年生までの児童にとって取り組みやすく、楽しくできるという諸特性が認識されたためである。また、小学校期にボールゲームとしてのハンドボールに親しむことは、生涯スポーツへの参加意欲を高めることにもなると考えられる。第３回ハンドボール研究集会では、このようなハンドボールの魅力や特性に対して認識を深めると同時に、子どもたちの発育・発達に見合ったハンドボールの授業づくりのあり方、方法について研修する。

［講演］「ハンドボールの運動特性を考える
―体育の目標との関連から―」
浦井孝夫（順天堂大学スポーツ健康科学部教授）

(講演概要)

以下の３点をふまえて、小学校におけるハンドボールの授業のあり方について述べられた。

①学習指導要領の改訂の趣旨とその背景
②体育の目標と内容の改訂
③ハンドボールの運動特性の検討

［研究・実践報告］

座長　佐藤　靖（秋田大学教育文化学部）

1　感覚づくりを中心とした低学年におけるゲームの指導
　木谷光男（秋田大学教育文化学部附属小学校）
2　小学校低学年における実践
　信原悦治（岡山市立大野小学校）
3　一緒に作ろう！　楽しいゲーム（第５学年）
　宮田直子（山形県米沢市立塩井小学校）
4　ハンドボール実践報告（第５学年）
　海老名久美子（山形県米沢市立西部小学校）



5　ハンドボールのゲーム教材としての発展性を考える
　小山　浩（筑波大学附属中学校）
6　ゴール型球技の基本種目としてのハンドボール
　板橋　哲（埼玉大学教育学部附属中学校）

教材としてのハンドボールに関する研究・実践報告が全国より寄せられた。本口頭発表会では、とりわけ６つの研究・実践報告が、ビデオ、ＯＨＰ、資料配布等によってなされた。いずれも授業実践者の創意工夫とその中で生き生きと動く児童の姿が感じられるものであった。

［パネルディスカッション］
「ボール運動教材によるハンドボールの可能性」

コーディネーター	塩谷　和雄	(神奈川県教育委員会)
パネラー	古井　邦一	(相模原市教育委員会)
	郡山　　強	(神奈川県立体育センター)
	尾崎　昭弘	(川崎市立生田小学校)

近年における児童の生活や運動意識の傾向と、それに対する体育・ハンドボールの可能性について、学校現場と行政の双方の立場から、活発な意見交換が行われた。

8月5日(土)

［小学校授業提案］

指導助言：古井邦一（相模原市教育委員会）

（高学年）「走って　もらって　ドン！」

授業者：前田利憲（川崎市立西御幸小学校）

協力者：矢崎雅子（同川崎小学校）、

関　恵美（同新城小学校）

（中学年）「思いきり投げるぞ！　大玉ごろろん」

授業者：荻原明恵（川崎市立南生田小学校）

協力者：酒井　勝（同東生田小学校）、

野原博人（同南生田小学校）

尾崎昭弘（同生田小学校）

たとえハンドボールのプレー経験のない小学校の先生でも、ハンドボールを教材にして効果的な体育の授業ができるようにと、神奈川の授業研究グループが中・高両学年の授業提案を行った。いかにチームで協力して得点するかという戦術学習と、遊びの中から投球フォームを自然に獲得できることを、ポイントにしたものであった。

［講　義］「ボール運動教材としてのハンドボール」

林　恒明（秋田大学教育文化学部教授）

児童が興味・関心を持ってハンドボールの授業に取り組めるようにするために必要な要素について、上記の授業提案にも触れながら、示唆を与えた。

［閉会式］

挨　　拶　㈶日本ハンドボール協会　常任理事　中澤　重夫

〈研究集会運営委員の手記より〉

第3回全国学校体育ハンドボール研究集会を終えて

第3回のハンドボール研究集会を8月4・5日に神奈川県（藤沢市県立体育センター）で開催しました。第1～2回の研究集会は2年続けて愛知で開催され、特に愛知県は小学校の登録の数では他県に比べけた違いに多いことや日頃からの組織的な研究や活動も熱心で盛んである。このような環境で開催された研究集会を引き継ぎながらの神奈川での開催となり、不安なスタートとなった。神奈川における学校体育（特に小学校）の教材としてのハンドボールは、まったくといっていいほど取り入れられていないのが現状であった。また小学校のクラブチームも常時活動しているのは2～3チームを数える程度であった。そんな状況の中、学生時代にハンドボールの競技経験のある先生方に声をかけ少しずつ輪が広がり、最終的には7人の小学校の先生方による研究グループが形成され、学校体育におけるハンドボールの教材研究が始まった。研究会の活動はとても意欲的で、内容を実際の授業で確認しながら研究を深め、その中からより良い教材を求める、活発な議論がなされた。

昨年の研究集会の講義・講演や授業提案などをふりかえると、あらためて学校体育における教材としてどのようにハンドボールを取り入れ、取り組んでいけば子どもたちにとって最適な教材になるかということを考えさせられた。それを土台として神奈川では、新指導要領ではハンドボー



ルを取り扱うことができるようになったことや、生きる力を考える問題解決・課題解決学習を視野に入れ、自然に動作や技能が上達する工夫、場作り、ルール作りの工夫、教具の工夫など様々なアイディアが上がった。

このような研究を進める中で自分が経験してきた競技性のハンドボールのあり方に新しい発見を感じた。数年後にはこのような子どもたちが中学校、高校、大学、社会人へと成長したときに、自分自身が指導者としてどうあるべきかを考えるよい機会となった。

本研究集会で発表するだけでなく準備や教材研究に携わったことは自分にとって大きな財産となった。

神奈川県ハンドボール協会研究集会

運営委員　加藤道夫（神奈川県立向の岡工業高等学校）

＊①今回の研究集会で授業提案を行った神奈川県ハンドボール協会の授業研究グループが、ハンド経験のない先生でも児童がハンドボールを楽しめるようにと作成した資料集を無料で差し上げます（A4版、26頁）。ご希望の方は下記の住所まで返信用切手（160円分）を添えてお申し込みください。なおその際に、研究集会資料請求とお書き添えください。

〒214-0036　川崎市多摩区南生田4－2－1

神奈川県立百合丘高等学校　南木雅弘　宛

Tel：044-977-8955

＊②ハンドボール研究第3号を作成するにあたって、ハンドボールの研究・授業実践報告を募集致します。詳細についてのお問い合わせは、下記の連絡先にお願い致します。

秋田大学文化教育学部　佐藤　靖　　Tel：0188-89-2577

（文責：神奈川県立六ツ川高等学校　村山明夫）

協会だより

平成12年9月度常務理事会

［日　時］平成12年9月9日（土）
13時00分～17時30分
［場　所］代々木第2体育館　会議室
［出席者］中澤副会長、常務理事8名、参事2名、監事2名、事務局2名

【審議事項】

1. フォーラム21について

平成11年度に続き、平成13年度に他球技と合同で開催することを承認。

2. 事務局後継者について

事務局退職者の後継者について、募集した結果最終2名の人選を決定した。

3. 全国理事長会について

全国理事長会について、理事長アンケートの結果、8割近くの賛成により開催することを決定。内容については、国体夏季移行、10万人会、NTS、登録問題などの議題が挙げられ、有意義な会とすることで了承。

4.「がんばれ10万人会」会報紙について

会報紙の創刊号を11月に発行する。内容は事業計画、決算報告、会員の声とし、全会員のほか、都道府県協会に送付することを承認。

5. 国体開催基準、会場視察について

第60回、61回国体の視察報告があり、競技施設については正規のコートとし、長さが足りないものについては、正規のコートで実施するよう指示することとした。

国体開催基準要項細則改定について、55回大会より簡素化効率化を図るため、屋内競技場のみとする改定のお願いを提出することを承認。

国体組み合わせ抽選会に関する要項（案）のシードの決定方法について、従来の方法を改定する要項を承認。

6. 全日本総合選手権大会について

平成12年度第52回大会要項（案）が示された。

出場枠については、以下の通り

	男子	女子
日本リーグチーム	8	9
日本協会推薦	4	3
全日本学連推薦	2	2
ジャパンオープン	2	2
計	16	16

参加料について、学生チームは75,000円とし、その他のチームは10万円とすることで大会要項を承認。

7. 2001年ビーチハンドボールブラジル世界選手権について

先に、ブラジルでの世界選手権に全日本チームを派遣することを承認していたが、その後、イランが参加を希望していることがわかり、再度AFおよびIFに日本の代表権について確認することとした。

参加に向けて計画書及び予算について報告があり、早急に大会要項、収支予算書、活動計画書の提出を求め検討することとした。

【報告事項】

1. 渡邊副会長のIF理事（会計理事）の立候補について承認。

2. IF／AF東地区セミナーが上海で開催され、AF問題として、大会日程の変更、アジア東西地区分け試合など改善策、日・中・韓アジアリーグの計画など協議された報告があった。

3. 第2次補正（案）について、委託金、助成金の追加収入に伴い、特別会計に計上し、2次補正として10月常務理事会に提議する報告。

4.「がんばれ10万人会」各大会での広報実施状況報告と、8月現在のサポート会員を都道府県別に報告。

5. 機関誌「OB登場」について、現日本協会役員を除いて継続することを承認。

6. NTS教本・VTRの販売について、トレーニングVTR2巻・指導教本1冊をセットして販売し、1セットの場合1万円プラス送料900円、2セット以上の場合送料1000円で販売することとした。協会役員、指導者、一般に販売し、販路を拡大していくことで協力を依頼した。

7. 7・8月実施の夏季大会の実績報告。

8. 各全日本アジア大会報告
2001年世界選手権東アジア予選大会
第8回女子アジア選手権
兼世界選手権アジア予選
男女ジュニアアジア選手権大会
兼世界選手権アジア予選
2001年世界選手権第3代表決定戦

9. 9月8日開催の平成12年度日本リーグ部長会報告

10. 日本リーグチームの休部について報告

平成11年度から
新会員登録制度
スタート！

がんばれ ハンドボール 10万人会



団結しよう！

ハンドボール・ファミリー

少子化の影響などにより登録人口の減少傾向が各スポーツ界の大きな悩みになっています。昨今の経済不況も深刻さを増すばかりです。

今こそハンドボール・ファミリーが団結する時です。皆さんが自分のチームを愛するように、日本ハンドボールを愛して下さい。登録人口が増え、財源が大きくなれば、小・中学校の普及はもとより、ビーチ・マスターズ・車椅子ハンドボールの支援、ミニハンドボールの普及、また強化の根幹となるジュニア層の重点強化、そして各大会の補助金アップや国際大会の招致などにつながります。

皆さん1人ひとりが主役です。選手、審判、役員、OB、OGなどに限らず新たなサポーターも募り、全員参加のもとでメジャー化を図り、ハンドボール文化を構築しましょう。

財団法人　日本ハンドボール協会

〒150-8050　東京都渋谷区神南1-1-1　岸記念体育館内
TEL.03-3481-2361　FAX.03-3481-2367
http://www.handball.or.jp/

● HANDBALL　FAMILY

	年会費	主な特典
グランド会員	10.000円	日本協会機関誌（年11回） 日本協会主催大会無料パス 会員バッジ 日本協会認定グッズの割引
ファミリー会員	3.000円	日本協会主催大会無料 ペア券1枚 会員バッジ 日本協会認定グッズの割引

■登録増によるメリット

- メジャースポーツとして認知
- 登録金の増収

↓

- スポンサーがつく
- 全員参加意識の高揚

↓

財源確保

↓

各種事業への活用と充実
- ○小・中学校の普及
- ○ビーチ・マスターズ・車いすハンドの支援
- ○ミニハンドボール競技の導入
- ○ジュニア層の重点強化
- ○各大会の補助金アップ
- ○国際大会の招致
- ○一貫指導体制の確立

グランド会員、ファミリー会員への入会方法

所定の申し込み用紙に必要事項をご記入の上、お申し込み下さい（郵送の場合は切手は必要ありません）。後日、日本ハンドボール協会から会員バッジなどをお送りします。年会費はご指定を受けた金融機関の口座から引き落としさせていただきます（ほとんどすべての金融機関でご利用できます）。

なお、申し込み用紙は、日本協会、各都道府県協会、または各全国連盟事務局にご請求下さい。

NTSビデオのご案内

申し込み方法

現金書留で、下記の住所に申し込んでください。
〒150-8050　東京都渋谷区神南1-1-1岸記念体育館内
財団法人　日本ハンドボール協会
NTS強化指導教本＆コーチングビデオ係

1セットの場合：10,000円＋送料（　900円）＝10,900円
2セット以上：（セット数×10,000円）＋送料（1,000円）
セット内容：強化指導教本……1冊、
　　　　　　コーチングビデオ60分VTR……2巻



[11月の行事予定]

［大会］
★高松宮杯男子43回女子36回全日本学生選手権大会
　11月22日～26日／広島市東区スポーツセンターほか
★第25回日本リーグ
　11月1日～29日／全国各地
＊詳細は10月号に掲載された日程表をご参照ください。

［会議］
☆常務理事会
　11月18日(土)／午前　東京
☆第2回理事会
　11月18日(土)／午後　東京

HAND BALL CONTENTS NOV

柔らかな感触で、最適なバウンド！

新発売

new



PKCH3-AD DX
5,500円

new



PKCH2-AD DX
5,400円

new



PKCH1-ADJ
3,600円



手縫い・国際公認球





PKCH3-AD
4,600円



PKCH2-AD
4,500円



PKCH2-ADR
2,700円





PKCH3-ADR
2,800円

MIKASA®
明星ゴム工業株式会社

(財)日本ハンドボール協会編『ハンドボール』第四一三号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
平成十二年十月二十六日印刷 平成十二年十一月一日発行
東京都渋谷区神南一－一－一
電話 代表 三四八一－二三六一
振替 〇〇一二〇－七－一〇二九三
編集兼発行人 市原則之
価格は登録金に含む